
超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴ

R C

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴ

【Nコード】

N9399D

【作者名】

RC

【あらすじ】

平和なこの世界の裏に隠された、人間VS怪物の壮絶な戦い。巨大なロボット兵器に乗る少年の、出撃が始まる。

第一話 ガギゲゴ、大地に立つ！（前書き）

この小説は、素人である私が作成するものです。よって、大変見苦しい上にミス打ち等が頻繁に存在します。ご承知ください。

ちなみにこちらの小説は、私筆者のブログでも掲載されています。詳しくはこちらをご覧ください。

<http://blogs.yahoo.co.jp/eiennniyakkaimonofolder/107835.html>

また、作中に登場するメカの画像などは にありますので、資料としてぜひご覧になってください。

ガンダム好きの人は大歓迎の小説です。

第一話 ガギゲゴ、大地に立つ！

2000年。人々が地球で歴史をつくりあげていってから既にものすごい年月が経っていた。

ここはとある県にある某都市、の中にある住宅街。そこに一人の少年がいた。名は山田次郎。国単位、いや、通っている中学校から見ても極めてマイナーキャラ。

彼は友人の家にいた。

「ちよつと待つてる。飲みもモン持つてくつからさ。」

山田次郎の友人、田村真の家は超高層ビル…というより20階建てのアパートだ。しかも真の住居は2階。なぜ2階を選んだのかは未だに不明だ。彼は台所からジュースを持ってきた。

しかしそのジュースは、この後に起こる危険を知らせていたのだつた。

ジュースは赤っぽい色をしていた。一見トマトジュースに見えたが、よく見るとその色は血に近かった。

（なんだ、この液体は…とりあえずトマトジュースに設定しておくとして、何ゆえこいつは初めて家を訪ねてきた友人にトマトジュースを勧めるんだ？まあ、なにか訳でもあるんだろう…）

「なんだ、飲まないのか？」

「え？いや、その…」

飲まないのは流石に友好関係を築くためにはまずいと、次郎少年はジュースに口を近づけた。だが、その液体は思った以上に想像とかけ離れていた。

（こ、この臭いは…：硫化水素！塩酸に硫化鉄を入れると発生する腐った卵みたいな臭いの硫化水素！！こ、これは飲めん！）

次郎は飲む直前に目の前にいる友人に単刀直入に聞いてみた。

「ねえ、これ、何のジュース？初めて見るんだけど…。」

「……………」

その時、次郎は危険を察した。

(こいつ、まさか…)

次郎はその感情をすぐに行動に移した。

「てい!!」

彼はその怪しい物質を真にぶちまけたのだ。

「ギャー!!」

液体は顔に降りかかり、真の顔は見る見るうちに別の生き物に変わっていった。

「貴様、よく異変に気がついたな。もし飲んでいたら、お前は今すでに死んでいた。」

「おま、トマトジュース出す時点で変だろ!まさか、おまえは…」
真だった人物は、顔の液体を振り払いながら言った。

「そうだ。オレは都市破壊を目的に創設された『ザ・ブレイカー』
でつくられたモンスター、『ゲルマニウマン』だ!!」

(『ザ・ブレイカー』!?)

「ややこしいな…じゃなくて、やっぱり存在していたのか…!それもこんなに身近に!!」

彼は動揺していた。そう、彼はその組織の名をすでに知っていたのだ。

彼、山田次郎は、実はある秘密組織の一員である。その組織とは、悪の軍団『ザ・ブレイカー』に対抗すべく同時に存在する組織、『アメシスト』だ。彼らはいつ発動するか分からない『都市破壊』を防ぐため、日々次郎のような偵察員を入れている。それが今、実行されるのだ。

(とにかくここにいと殺される。すぐに脱出しよう!)

次郎は勢いよく真の部屋のガラスを破った。そして彼は20階建てアパートの2階から飛び降りた。もちろん骨折はしない。

「待て！何処に行く気だ！逃がさんぞ！！」

ゲルマニウマンと名乗る怪物はすかさず追ってきた。

（どうしてこういう時って道路の通行人の存在が消えてるんだ？いや、そんなことはどうでもいい、早く博士に知らせよう。しばらく使っていないからな、作動すればいいが…）

そう思いながら次郎は左手の腕時計のボタンを力強く押した。

「博士、ポイント22305の隊員624から出動要請のシグナルが出ています。どうしますか？」

某都市のビル内から声が発せられた。

「とうとう奴らが動き出したか…。G計画、始動だ！！」

「どこまで追ってくるつもりだ？ベン・ジョンンか！？」

アパートから脱出して500メートルは走っただろう。しかし、ゲルマニウマンは未だに追ってくる。

その時だった。地面がグラグラとゆれた。その揺れに驚いて次郎は立ち止まってしまったが、後方の生物も同じく揺れに気づいたのか立ち止まっていた。

（ま、まさかアレを使うんじゃないか…！？）

地面が動いた。それと同時に、道路がまっすぐに割れトンネルのような巨大な空洞ができた。そして奥からガガという戦車のような音が聞こえてきた。

（…やっぱり、使っちゃうのか…）

そしてその空洞から一つの巨大な物が出てきた。それは機動要塞だった。

「隊員624、山田次郎！」

眼を凝らして見てみると、その要塞に一人の中年のおっさんが立っていた。

（コックピットに乗ればいいのに…。カッコつけたいからって無理しちゃって…。）

そう言いながらも、少年はそのおっさんに返事をした。
「ドッペルゲンガー博士、ここです。」
振動はおさまり、怪物は再び動き始めた。

「博士、やはりあいつらです。やつらが動き始めたんです。」
「そんな事はもう分かっている。今はこいつに任せるしかない。早く乗れ！」

次郎は怪物を引き離し、要塞に乗り込もうとしているところだった。

「早いうちに片付けてしまおう。時間がたつと、いろいろと厄介な事になる。」

二人は要塞の鳥の口ばしのような部分に乗った。(画像参照)

「ところで、こんな大きな兵器を使うことも無いと思うんですが…。相手は人間単位の大きさですよ。ちよつと大人げ無いんじゃないんですか？」

「だから、これから大きくするんじゃないか。あれを見る。」

博士と名乗る男の指差す先に、その敵がいた。

「\$ ……」

奇妙なうなり声をあげながら怪物はその要塞と同スケールほどまで巨大化した。

「ほら、つりあつただろう？」

「『ほら』じゃないですよ。あなたが変な事言うから設定が変わっちゃったじゃないですか。倒せなかったらどうするんですか!？」

「第一話って書いてあるから大丈夫だろう。気にすることは無い。それより変形だ。しつかり掴まってるよ。」

博士はボタンを押した。ギシギシと音を立てながら、要塞は形を変え、たちまち巨大なロボットに変形した。

「超機動要塞、ガギグゲゴ!！」

ロボットから音声が出た。

「あのおー、今の無意味な言葉、もしかして博士の声ですか？」

「え？あ、ああ。技師に頼んで入れてもらったんだ。『おしゃりノート』よりはマシだろ。」

「…それともう一ついいですか？」

「何だね？」

「スキだらけの変形中や話している時に攻撃してこない怪物の事も気になるんですけども、このイスはどうにかならないんですか？」

二人の乗っているコックピットはロボットの頭部に變形していた。角度は變形前後も変わらず水平を保っているのだが、向きは變形の設定上前後逆になっている。（画像参照）

「…イス、回らないんですか？」

「…すまん、一度も變形のテストをしていなかったから、操縦席の事を頭に入れてなかった。我慢してくれ。」

「…あなたバカですか？」

「バカって言うな。バカとは違うのだよ、バカとは！！」

「お願いですから黙ってください。」

第二話 二つの組織（前書き）

ガギゲゴの画像（がある私のブログ内の記事）URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/eienn>

niyakkaimonno/291007.html

第二話 二つの組織

山田次郎とドッペルゲンガー博士は組織『アメシスト』の中でも仲の良いほうだった。しかし、その二人が同じロボットの中にいて戦っているとなると、話は別だ。

「Gブラスト、発射用意。」

次郎はロボの手に付いている武器を使おうと、腕を曲げる動作をした。ガギゲゴという名のそのロボットは、中の操縦士から分かるほどぎこちない動きをして腕を曲げた。おそらく関節の可動範囲が制限されているのだろう。

「博士、ちゃんと動くところは動くんではしょうね？」

「おまえはRCん家のブロックの少なさを知らないのか！？あんな数で種類も欠しいパーツでこんなに複雑な変形を再現できただけでも珍しいんだ！！」

「じゃあ、変形機構を無くせばいいんじゃないのですか！？」

「そしたら誰かがガギゲゴのおもちゃを買うんだ！？この小説がヒットすれば作者の家に某玩具会社の社員が来て、ガギゲゴを商品化するだろう。だが、何のギミックもないロボット玩具など、誰が買うと思うんだ！？」

「…そんなセリフ言つと、ますます商品化から遠ざかって行くような気がするのですが…」

そんなことを話している間に、敵が襲いかかってきた。

「お命、頂だいたす！！」

「うわー、なんか相手がかっこいい！！…じゃなくて、Gブラスト、発射！！」

次郎は隣の席のおっさんを押しつけて、武器発射のボタンを押した。

「な、何だこのエネルギーは！ギヤー！（2回目）」

怪物は一瞬でGブラストなる武器から発せられたビームに溶かされ、消えた。

「えっ？一瞬で終わり？さっきの前置きは何だったの！？」

「…Gブラストの威力だ。今までの某ロボットアニメは、必ず一番最初の攻撃はあまり効果が無かった。しかし、Gブラストは最初の攻撃であるにもかかわらず、敵を撃破した。我々は人類史上初めてのことをやってのけたのだ！！」

「…だから何なんですか？」

二人はその戦場から撤収した。

「博士、ところで毎回こういうヒーローもので怪物が大暴れしてロボットとかが倒した後って、どうしてニュースで放映されたりマスコミが来たりしないんですか？」

「…メン・イ・ブラックをパクッたつもりはないのだが、戦闘中メカから一時的に無意識になりその戦闘の記憶を無くす超音波が発信され、人間の記憶を消してるんだ。一種の催眠術だ。だから、戦闘中に野次馬が来たりしないようになってる。」

「…思いつきりパクッてないですか？」

二人はアメシスト特設基地に向かっていった。

「適度な対処を感謝する、次郎君。以後も偵察の任務を続けたまえ。」

「ありがとうございます、ストックホルム大佐。」

「ここは某都市の中心部に位置する市役所だ。詳しく言うと『環境課第七部事務室』だ。しかし、部屋はあっても肝心の環境課第七部はこの市には存在しない。」

なぜならば、この部屋こそアメシストの本部への入り口なのだ。

「おまえ、どうして大佐に怒られなかったんだ？俺は何をしても大目玉だがなあ。」

「理由、なんとなく分かりますよ。」

ストックホルム大佐は、以前からあったこの組織をアメシストとして再設立した張本人だ。ちなみに設立者がいる基地があるということ、某都市はアメシストの中心となっている。

それと、アメシストは階級制ではないのだが、なぜ彼の愛称が『大佐』なのかは謎だ。

二人は地下の兵器開発研究所へ移動した。

「ところで、次郎はサイエンサーについてはまだ頭に入っているのか？」

「サイエンサー…ええ、さっきの怪物の事でしょ。実践は初めてだったので、本物を見たのも初めてでしたけど。でも、サイエンサーは普段は人間に化けて生活していることも、それが日本だけでも10万人もいることも、覚えていきますよ。」

「なるほど、賢いわけだ。」

話しているうちに二人は目的地に着いた。

「ところで博士、ガギグゲゴは誰が造ったのですか？2、3年訓練を受けているのですが、まだ教えてもらってないんですよ。僕はその人にできれば文句を言いたいですね。」

「うーん、俺も詳しくは知らないんだよな。話によると、だいぶ前からあるらしい。ぶつちやけ言うとすべてRCが創ったんだろっけど、それは子供の夢を壊すから無視するとして…噂ではバンクーバー・ハンバーガーという技師が開発したと聞いている。ま、俺がここに来る前からあったからもつと年寄りの人に聞いてくれ。なにしろ組織自体の歴史が古すぎるんでな。」

「…確かあなた、経験上ガギグゲゴを変形させたのは今日が初めてって言っていましたよね、前の話で。」

「……」

「つまりあなたはかなりの年月使っていなかった変形機構を今日、ろくにメンテナンスもしていないのに使用したんですよね。安全に作動するという保障は何処から湧いてきたんですか？」

「…すみません。もう二度としません。許してください。お願いし

ます。」

「…あなた本当に博士ですか？」
その時だった。

「緊急事態、緊急事態！ポイント22831にてサイエンサー確認。
ガギグゲゴ緊急スタンバイ。各員、ただちに持ち場につけ」

「さあ、俺たちの出番だ！」

「俺はザ・ブレイカーのサイエンサーのアルミニウマンだ！さあア
メシスト、勝負だ！」

アルミニウマン明記の怪物は力強く叫んでいた。

「分かりづらいから連体修飾語を2つ重ねないでほしいな。いや、
それより、なんで僕がまたパイロットなんですか！？僕、候補生じ
やないですよ！」

「何言ってるんだ、第一話で乗った奴が以後パイロットを務めるのは、
ロボットアニメの法則ではないか！」

「一体アメシストはどうなってるんですか！？まあ、しょうがない
ですね。僕主人公だしそれでいて±0になるから許しましょう。と
にかく、早く変形させましょう。」

ガギグゲゴは要塞からロボットへと変形した。

「一気に片付けましょう。Gプラス…」

「ちよつと待て。試してみたい武器があるんだ。本部、『ギャギユ
ギョ』をこつちに射出してくれ。」

それから1分。ガギグゲゴとアルミニウマンは激しい接近戦をして
いた。

「次郎君、ギャギユギョが届いたぞ。装着だ！」

ギャギユギョというこれまた酷いネーミングの偵察機らしい乗り物
は、ガギグゲゴの腕部に装着した。ギャギユギョのザ のような一
つ目からはビームの刃が出てきた。

「さあ、一撃必殺だ、ガギグゲゴ！行つけえー！！」

博士は子供のように叫んだ。おそらくオートだろうが、ガギグゲゴは素早く動き、敵を一刀両断した。

「ライトニング雷斗忍愚・舞零怒！！」

「ギャー！！（通算3回目、以後省略）」

敵のサイエンサーは倒れたかに思えた。が、しかし…。

「…は、博士！漢字の変換に苦労したと思うけど、敵はまだ生きてます！！。」

「…なめられたものだな…」

敵の残骸は何か言っているようだった。二人の搭乗者は音声のボリウムをMAXにして聞き取るうとした。

「…この…戦いは…今まで以上に…はげ…しい…戦いに…なる…だろう…。…待っているよ、アメシスト！！」

それがアルミニウマンの最後の言葉だった。

「さあ、可動範囲の少ないガギグゲゴはどうやって接近戦をしたのだろうか…？」

「少年よ、戦いが終わった後ぐらいは気分がいいからそんな哲学はやめておこよう。」

「そついえば博士、一つ確かめたい事があります。…あなた、オタクでしょ？」

「…えっ！どうしてそれが分かった!？」

美しい夕日が二人を照らしていた。

第三話 ファインディング・サイエンサー（前書き）

ギヤギユギョの画像URL

http://blogs.yahoo.co.jp/eienn
niyakkaimonno/291808.html

第三話 ファインディング・サイエンサー

前話の話が日曜日の出来事だとすると、今日は月曜日だ。次郎はアメリシストの一員とは言えども、設定ではまだ中学生なので、学校に行かなければならない。その中でサイエンサーの動きを見つければ、彼の役目だ。

「田村がサイエンサーだったのなら、学校には他にもうじゃうじゃいるはずだ。問題は、どうやってそれを見抜くかだ。」

次郎少年はぶつぶつと独り言を言いながら登校していた。

「それを尋ねたら、これを使えとドツペルゲンガのおっさんに渡されたんだが。」

少年は誰に見せるつもりも無く、バッグから封筒を取り出した。

「…あの人のことだから、どうせ不良品だろう。ま、試してみる価値はあるけどな。」

学校に着いた次郎は、早速封筒を使ってみることにした。彼は封筒を勢いよく破いた。

「いったい何が出てくるのかな…?」

中からは、二種類の色の付いた紙がでてきた。

「…?これ、『リトマス紙』か!?!そんな適当なものでいいのか!」

封筒の中には、取扱説明書もはいつており、それにはこう書かれていた。

《リトマス紙を発明したスペインの化学者『デ・ピラノバ』は実是对サイエンサー組織の一人で、彼はリトマス紙に隠されたある性質を残した。それが、『ファインディング・サイエンサー（サイエンサー探し）』の機能だ。リトマス紙をサイエンサーに持たせると、リトマス紙は赤から青では無く、青から赤でもなく、別の反応をするのだ。詳しくは、WEBで <http://w...>》

「…アメシストのホームページってあるんだ…。」
次郎は毎回のことで、もう慣れてしまっていた。彼はリトマス紙を自然な形でサイエンサー（だと思おう人）に触れさせる方法を考えた。

（作戦その1、『テーキング・スリーブ作戦』。上手く触ってくれればいいが…。）

次郎は消しゴムのスリーブを取り、代わりにスリーブに似た青のリトマス紙を貼り付けた消しゴムを作った。

（うおら！）

授業中、彼は不意に見えるように、意図的にその消しゴムを前の席の友達のところへ投げた。

「おい、消しゴム跳んできたぞ。気をつけるよ。」
前方の男子は消しゴムに手を近づけた。

（さーて、どうなるか…）

手がスリーブに触れた。が、しかし…。

（…あれ!?!）

スリーブは何の反応もせずに作戦1は終了した。

「博士、一体どうなってるんですか!?!リトマス紙は何の反応もしませんよ!?!」

授業終了後、次郎は即刻アメシスト本部のドッペルゲンガー博士に職員室から電話した。

「えっ?そんなはずはないぞ。確かに『赤は濃い赤、青は濃い青』になるはずだ。とても分かりにくいかな。」

「…は!?!」

次郎は先程の青のリトマス紙を確認してみた。よく見ると、光の当たり具合のせいだと疑わざるを得ないぐらい微妙に色が濃くなっていた。

「こんなもの…分かるわけ無いじゃないか!?!」

次郎は激怒して電話を切った。

「アメシストって…何なんだ！！10円返せ！」

彼は再度アメシストの入隊を悔やんだ。

次郎少年がアメシストを知り、それに加わったのは今から2年半ほど前のことだ。彼がサイエンサーを知ったとき、教官に命令されたことは『この世の中には良心のイエンサーもいれば、悪心のサイエンサーだっている。人態（人間の状態）から元態（もとの状態）になった奴は悪心のタイプだから、すぐに知らせてきたら始末しろ。』だった。それこそ彼のただ一つの任務だった。

彼がアメシストに入ったきっかけは彼の両親にあった。

彼の親は同じくアメシストに入っていた。その頃、サイエンサーの動きが非常に活発だった。

一度に2体以上出現することは今まで通算しても一度も無かった。しかし、それまで3日に一度程度だった彼らの活動が毎日頻繁に起きたために、アメシストの戦闘員は日々重なる疲労で戦闘力が劣り、死者はでないもののケガ人が続出しアメシストはパニックに陥った。アメシストは代わりになる人材を次々と入れたが、この状況がとも長く続いたため組織は人集めに苦労していた。

そんな時、山田夫婦は息子の次郎をよこす事を思いついた。

「次郎は強い男だ。きっと役に立ってくれる。」

次郎には疲労に耐えるためにこれまで以上の訓練を受けさせた。

が…。

「何？あれからサイエンサーの活動が止まっているだと！？じゃあ、息子の次郎はどうなるんだ！！」

ザ・ブレイカーの動きは次郎の訓練が終わった途端になくなってしまったのだ。仕方なく、少年はいわゆる『スパイ』として元通り生活し、ひよんな事から今では戦闘員になっている。

ちなみに、大失態をしてしまった山田夫婦は、息子に会わせる顔が無いという理由で遠いところに別居しており、今は子供のいない

アメシスト隊員のカップルを儀父母として次郎の家にやっている。次郎はいつ来るか分からない両親の連絡を受け取るために、定期的にアメシスト本部に行っては、ドッペルゲンガー博士らについてだからと訓練を受けさせられている。

(佐々木(先程の友人)がサイエンサーだったのなら、奴と親友の中村も怪しいな。そして中村はうちの学校のなかでも特に顔が広い(慣用句)から…この学校の生徒のほとんどがサイエンサー!?)
よ、ちよつと待ってよ!)

次郎は自分の想像のなかで怯えた。そんな時、頭に浮かんできたのはこの言葉だった。

「この世の中には良心のイエンサーもいれば、悪心のサイエンサーだっている。」

それは昔彼をスパイまで育ててくれた教官の口癖だった。

(…そうだよな。真は悪心のタイプだったけど、まさかこの学校のサイエンサー全てが同じタイプだとは思えない。いや、思いたくも無い。だって、みんな俺の大切な…)

その時次郎は誰かに肩を叩かれた。それはサイエンサーの佐々木だった。

「佐々木、何かあんのか?」

しかし佐々木の姿は佐々木ではなくなっていた。

「お前は俺を知りすぎた!!」

「博士、殺さずに済む方法は無いんですか?」

少年は友人の事をすぐにアメシストに知らせ、ガギゲゴに乗っていた。

「しかたないだろ、今のあいつはお前の友人ではなくサイエンサーのチタンマンなんだ。サイエンサーの掟でも決まってるんだぞ。変

態（状態が変わるという意味）したら殺る許可が得ることもない！」

（世界の平和のためには犠牲は惜しまない、ということか…。）

博士はギャギユギヨを使った。偵察艇及び追加武器のギャギユギヨはガギグゲゴ本体に既に付いてたらしく、今回は装着はすぐに終わった。

「雷斗忍愚・舞零怒！！」

ガギグゲゴはチタンマンを粉碎した。が、また…。

「博士、ギャギユギヨは意味ありませんよ！だって敵は、まだ生きています！！」

「くっ…！二回目か！！」

チタンマンは前回のサイエンサーよりは元気な形で残っていた。

「まだだ、まだ終わらん！」

チタンマンはガギグゲゴへ一直線に向かってきた。

「と、特攻か！？」

サイエンサーには自ら爆発する能力があった。それは敵に殺された時以上のエネルギーでの爆発で、その時の戦闘時間デーションにもに比例して、驚異的な破壊力を持つ。

「ええい！！」

ガギグゲゴは接する直前にギャギユギヨでそれを再び切り落とした。画面に大きく映ったチタンマンには、わずかに次郎の友人、佐々木の面影があった。

第四話 ザ・ブレイカーの脅威

「ガギゲゴが使えない!？」

ストックホルム大佐の声は山びこのようにアメシスト本部内に響いた。

「すみません大佐。先日の戦闘でガギゲゴは大きく損傷を受けました。サイエンサーの爆発を間近で受けてしまったことが原因だと思われませす。」

「ドツペルゲンガー、もつと機体を慎重に扱え!…下がれ!！」

「は!！」

博士は深くお辞儀をした。次郎は横の可哀想なおっさんを見ながら、人生つて色々だなあ、と思った。

「次郎君、ガギゲゴが直るまではギャギギョに乗ってくれたまえ。無人機として作られたメカゆえに、多少は乗りづらいつとは思いますが、すべては平和のためだ。では、その世話を頼んだぞ。」

そう言いながら彼は博士を指差した。二人は部屋を出た。ドツペルゲンガー博士は部屋から離れると力いっぱい叫んでいた。

「ひ、い、き、だー!！」

サイエンサー、別名プロツケン・モンスター。サイエンサーというのはアメシスト独自の呼び名で、プロツケン・モンスターとは彼らが使う名前だ。今となつてはほとんどがサイエンサーで通称されている。

彼らはザ・ブレイカーでつくられたモンスターだ。そのザ・ブレイカー自体は紀元前からあったとされている。情報によるとサイエンサーは化学反応によって生まれるらしいが、自然的にそれが発生する事は物理的にありえないため、誰かがサイエンサーという生物を発明したらしい。詳しい事は過去の記録がその古さ故に解読できないため、よくは分からない。受け継がれていく伝統だけが情報を

つかむ鍵だ。サイエンサーははじめは竪穴式住居を壊し、古墳を破壊し、人類の繁栄を止めようとした。しかし、人間側もそれを防ぐため抵抗団体「紫外線」を設立した。この頃の戦闘はお互いに原始的であったためザ・ブレイカーは人間の勢力におされてしまった。そのためモンスターたちは戦意を失ってしまった。その上、モンスターの一人が『罪の無い人間に攻撃するのはおかしい』と言ってしまったために、9割のサイエンサーは人間に化ける能力を使い、人間と共に生活する道を選び、旅立っていった。後々紫外線は、混乱を防ぐためにサイエンサーの存在を隠すようになり、サイエンサーたちと条約（いわゆる法律）を結び、彼らと中立をはかっていた。しかし、残った悪心のサイエンサーらは活動を止めないため、紫外線は名前を変えながら常に人類の歴史に存在し続け、ストックホルムが2000年への突入を切欠に『アメシスト』として再び設立したのだ。今では、アメシストは日本全国の都市に存在するようになった。

ちなみに、ガギゲゴがいつの時代に作られ、使われるようになったのかは永遠の謎だ。

ザ・ブレイカー自体を作り、サイエンサーを誕生させたのが何処の誰なのかも…。

中学校で、山田次郎は怯えていた。

（このままだと、僕の周りから人がいなくなってしまう。なにか、策を考えないと…）

次郎は次々とサイエンサーとして消えていく友人に恐怖を感じていた。

（いくら悪心のサイエンサーと言っても、人態では僕の大切な友達だ。その『悪心』を消す方法は、まだ有るはずだ。）

しかし、彼はまだ子供だ。秘密組織アメシストの偵察員・戦闘員

とはいえど、できることに制限があった。そんな中、彼の頭の中におかしな事が浮かんでできた。

「ガギグゲゴを破壊しろ」

そして次郎はそれを感じてしまった。

（ガギグゲゴを破壊！？）

それはとんでもない考えだった。

（確かに、ガギグゲゴを破壊すればサイエンサーは死なずに済む。

でも、そうすると日本、いや世界が…）

したくもない想像だった。平和を保つか、友人を助けるか。彼は平和を優先せざるを得なかった。

（ガギグゲゴを壊すのは簡単なことだ。前の戦いで壊れた部分を再起不能にすれば、済むことだ。だが、一度なくなった平和は二度と取り戻せなくなる。だから僕は…）

その時、背中を誰かに押された。同学年の中でも不良に大きく値する森だった。

「廊下でつつ立てんなよ、アホ！」

そう言っただけ彼は立ち去った。次郎はその衝撃で転んでしまった。

運悪く、ちょうど移動教室の授業が次にあつたため、彼は筆箱を持つていてそれを吹っ飛ばした。それに加えて偶然筆箱が開いていたらしく、中の文房具他も吹っ飛んだ。

（…あいつは廊下で立たないのかよ…）

次郎は文房具を拾い上げた。そして目の前に誰かが立っているのが見えた。

「またハデにぶちまけたなあ、山田。」

それは隣のクラスの担任の松永先生だった。彼はその鍛えられた腕で一緒に物を拾ってくれた。

「じゃ、先生はこれから出張があるんだ。今度から平面で転ばない訓練をよくしとけよ。」

彼もまたすぐに去っていった。次郎は筆箱の中身を拾い残しがないかよく見てみた。

(全部あるよな…。まったく、酷い奴だ。)

そして彼は、筆箱の中に前回の残ったリトマス紙を入れておいたのを見て思い出した。

(このリトマス紙もあまり役にたたなそうだから、後で処分しとくか。…ん!?)

リトマス紙は未使用のはずなのにわずかに色が濃くなっていた。くつきりと指の形で。

(あの人も…サイエンサーだったのか!)

次郎はある作戦を思いついた。それは、極めて危険な作戦だった。松永は出張の理由で学校から出た。次郎はそれを尾行していた。

(敵の本拠地に潜入して、親玉となんとか交渉すれば、友人は死なない!)

それが彼のマニフェストだった。

しかし、1分もしないうちに彼はターゲットを見失ってしまった。

(…あれ?気づかれたのか?)

その時、背後の誰かに口に何かをあてられた。

「だ、誰だ!これは…」

「夢を見れる薬さ。しばらく眠ってな。」

次郎は睡眠薬の影響でその場で眠ってしまった。

「ここは…何処だ!?’

次郎は暗闇の中で目を覚ました。そこは洞窟のようなところだった。具体的にどの地域の何処というのは全く分からなかった。一つ確実にいえることは、彼のいる場所は鉄格子がはめられていて、自由の出入りができそうにないという事だった。彼は囚われたのだ。

「ミイラ取りがミイラになった、ということか…いや、なんか意味違う気がする。まあ、そんな事どうでもいいや。何か出る方法は…」

ここはおそらくサイエンサーらの基地だろう。少年は鉄格子をゆすってみた。しかし、多少は錆びているものの、はずす事は不可能に近かった。

「まだだ！」

彼はGウオッチを思い出した。Gウオッチは第一話で登場した、緊急シグナル用の時計だ。だが、彼がいくらボタンを押しても、何の反応もなかった。

「お決まりのパターンですか…。あーあ、買い溜めしといたガンラ、作っておけばよかったな。」

彼は作戦を思いついた事と、未作成のガンラを悔やんだ。だが、それはまだ早かった。

「まだ手はあるぜ、少年。」

牢の外に一人の少年が立っていた。彼は日本人に見えたが、瞳は青かった。少年は持っていた鍵で牢から出させてくれた。

「一つ断っておく。君を眠らせたのは、俺だよ。」

次郎とあまり年のかわらないようにみえるその少年は、やぶから棒にそう言うてきた。それを聞くなり、次郎の頭に怒りが上つてきた。

「おまえ、俺に一体何の恨みがあつて…！」

「ま、待て。これには訳があるんだ。それより、早くここから逃げよう。俺の名はジョン・ブラウン、イギリスの対サイエンサー組織『トパーズ』の一人だ。」

第五話 脱出

「俺はサイエンサー退治のため、トパーズで偵察員をしていた。君と同じようにね。三年前、トパーズはイギリスのザ・ブレイカーの本拠地を叩く作戦を決行した。しかし、作戦は失敗。仲間のみなその場所から脱出することができたが、人数あわせのために呼ばれた俺はまだ未熟だったために一人そこに取り残され、さっきまでの君と同じ扱いさ。」

走りながらジョン・ブラウンという名の少年は、誤解を解くためにそう説明した。

「それから俺はサイエンサーたちにたらい回しにされて、色々なところに行つた。おかげで世界一周旅行の思い出ができたよ。」

「そして最終的にたどり着いたのがここだったのか？」

次郎の質問にジョンは軽くうなずいた。

「俺は、何でもするから殺すのだけは勘弁してくれと頼んだ。そして、奴らは人間の拘束員に任命したんだ。」

彼ははずらずらと話したが、次郎はまだ怒りを覚えていた。

「人類を裏切ることに罪悪感を感じなかったのか!？」

「感じたさ!出来ればやりたくはなかった。だから俺は人を捕らえるたびに、こうやって逃がしている。その時に俺はドサクサに隠れて一緒に逃げるのが毎度の計画だ。」

「でも、いつも失敗してしまふ、と…」

「…いうわけだ。どうもタイミングが悪くてな。」

二人の考えははようやく固まった。

「俺は山田次郎、アメシストの偵察員及び戦闘員をやっている。さあ、早いとこ出ちまおう。」

二人の少年は全速力で走った。

「全モンスターに命令する。二人の人間が脱走を謀っている。直ち

に捕まえる！」

基地内に放送が流れた。

「さすがに見られたか…。」

「当たり前だ！ここには500人以上のサイエンサーがいるんだぞ。」

どのくらい走っただろうか。次郎の目に文字が飛び込んできた。

《ザ・ブレイカー第04基地司令官室》

それは部屋名のプレートだった。そこは次郎が交渉を求めている相手がいる場所だった。

「僕はここに用がある。ジョンは先に逃げてくれ。」

ジョンは彼を引き止めなかった。

「…健闘を祈る。必ずまた外で会おう。」

それはその日基地内で聞いた最後の人間の言葉であろう。彼は走っていった。

（頼むぞ、俺の運氣！）

次郎は部屋の扉を開けた。

扉の中の部屋は、洞窟とは思えないくらいきれいで清潔だった。

そこはまるでお金持ちの豪邸のようだった。運よく、部屋には警備のサイエンサーはいないらしく、いかにも偉そうなサイエンサーが一人豪華な椅子に座っているだけだった。

「よくここに入る勇氣があったな。褒めてやろう。」

司令官のサイエンサーはそう言った。あまり短気ではないようだ。「僕はあなたを殺しにここに来た訳ではありません。お話がしたいのです。」

「…よからう。」

次郎とサイエンサーとの交渉が始まった。

「単刀直入に聞きます。悪心のサイエンサーを良心のサイエンサー

に変える方法はあるのですか？」

「…何が言いたいのだ、貴様は？」

次郎はこれまでの怒りを話した。

「僕が初めてサイエンサー、いや、元態のサイエンサーを見たのは たった5日ほど前でした。そのサイエンサーは僕の友達のはずでした。しかし、彼の姿は怪物に変わった。僕は怯えた。それから彼は我がアメシストによって粉碎された。それはこれからも何度でも起こると思います。僕は友をこれ以上失いたくないのです。教えてください。」

相手のサイエンサーは極めて冷静だった。

「それは無理な質問だ。悪心のブロッケン・モンスターと良心のブロッケン・モンスターは種類の違いではない。だからワクチンを接種したところで、変わるという訳ではない。問題は彼らの心の中身だ。」

ブロッケン・モンスターとはすなわちサイエンサーの事だ。次郎は質問を変えてみた。

「では…変態を不可にする方法は？」

「…あるよ。」

次郎の一番期待していた言葉が発せられた。

「不変薬という薬がある。その薬の感染力はとても強力で、一度開いた空間でビンの蓋を開けてしまうと、一日で世界中のブロッケン・モンスターが影響を受けることになる。」

次郎は急いだ。

「その薬が欲しいのです。何処にあるのですか？」

「ここには無い。それは…おまえを殺してからだ！！」

サイエンサーの手から触手のような物が伸びた触手は次郎の首へまわった。彼はそれを振り払った。

「…いつか必ずそれを…手に入れて見せるぞ！平和のために、友人のために！！」

少年は部屋から出た。サイエンサーは長く伸びた触手を縮めてい

た。

(あの少年は必ず不変薬を探しに来る。…その前に始末だ！)

「ジョン、待っていてくれたのか？」

彼は例の部屋のすぐ近くで跳びかかるサイエンサーと格闘をしていた。と、いうより、彼はサイエンサーよりはるかに強く、喧嘩より虐待のほうが意味としては近かった。

「俺だけ帰ったら、アメシストの人たちに一生偏見されるからな。」
二人は再び走り始めた。

「この先が出口だ。急げ！！」

前方にかすかに光が見えた。光との距離がどんどん近くなた。

「うおら！！」

「てい！！」

彼らは勢いで外への扉を破った。そこには誰かが立っていた。

「は、博士！？」

それはドツペルゲンガーだった。

「急いでこれに乗れ！君もだ！！」

博士の近くに偵察艇ギャギギョが着陸させてあった。3人は即刻それに乗った。

「トパーズの隊員175、ジョン・ブラウン。無事帰還ご苦労だった。」

3人は無事アメシスト本部に到着していた。

「僕は仲間を裏切り続けた悪い男です。すべて次郎君のおかげですよ。」

ジョンはそう返事した。

「大佐、どうして居場所が分かったんですか？Gウォッチは使えなかったのですが…。」

「サイエンサーの基地は複雑でな。壁がマジックミラーのようになってるんだ。」

彼が言いたいのは、中からは信号を発信できないが、外からの探索は可能だという事だろう。

「それから、報告があります。僕は司令官のサイエンサーと話をしたのですが、不変薬というサイエンサーの変態能力を止める薬があるそうなのですが…ご存知で？」

ストックホルムは少しの時間黙ってから、答えた。

「…一度か二度、風の噂で聞いた事がある。だが、誰かが作った嘘話だと思い、アメシストとしてはいつも聞き流していた。特に確信するための証拠が無いため、うかつに敵基地へ侵入して犠牲者をだすことは出来ないからな。…やはり存在していたのか…。」

「その噂では、それは何処にあるのですか？」

彼はまた口を閉じた。そしてまた話し始めた。

「はつきりした場所はよく分からないが、一番の可能性は…」
二人の少年と一人のおっさんはツバを飲んだ。

「…東京都だ！」

彼らの真の戦いが、今始まる。

第六話 めざせ東京

東京都は某都市からはかなり遠い地域に入っていた。その上、ガギグゲゴは飛ぶ事はできるものの長時間の飛行は不可のため、海から運搬船で太平洋を通って運ぶ事になった。また、ガギグゲゴの修理がまだ終わっていないという理由もあった。

不変薬奪取部隊は、まだ薬の存在に100%の確信が得られていないことを理由に、例の3名のみが選ばれることとなった。

「博士、海まで行くのにどうして市営バスを使うんですか！？ものすごいカッコ悪いんですけど。まあ、リアリティを追求するのはよく分かるのですが…。」

「アメシストにはあまり財産が無いんだ。だから少しでも節約をせにゃならん。」

「…日本って大変なんだな…。」

次郎、ジョン、それにドツペルゲンガーはガギグゲゴを運ぶための港へバスで向かっていた。

「ガギグゲゴは飛行能力を使って無人飛行で目的地へ向かっているが、それに俺たちが乗ると余計に負荷がかかって、何が起ころか知ったこつちや無い。飛行可能時間が限られている上に修理が済んでないからな。」

「俺、イギリス出身で本当に良かった…。」

「そつえば、ジョンはどうして日本語を？」

「そんな事か？我がトパーズなどの対サイエンサー組織は、すべて日本のアメシストから発祥したんだ。だから、いつ日本に行つてもいいように、トパーズに入ると一番最初に日本語を覚えさせられる。俺はともそのやり方に賛成できないんだけどな。覚えるのに5ヶ月かかったし。」

「やつぱり、どの組織もやることは適当なんだな…。」

次郎は内心安心した。

「私がガギグゲゴ運搬担当責任者、それと運搬船船長のボルケーノ小野だ。船が東京に着くまでは、私の命令を第一に聞いてもらう。いいかね？」

三人は港に着いてすぐにその男に会った。3名の勇者は彼に深々と敬礼をした。

（アメシストにまともな名前の人はいないのか！？）

次郎の彼に会った第一印象はそれだった。

船は『運搬船』との明記だったが、ガギグゲゴを上に乗せるため巨大なものになっていて、それは空母に近かった。

その日の午後9時、ガギグゲゴを東京まで運ぶため運搬船『ダクオン』は発進した。

午前3時、東京まで後一步という時に、その警報は流された。

「前方に未確認物体発見！サイエンサーの可能性あり、全乗組員は直ちに戦闘準備！」

それは彼らの運命を大きく変える音だった。

「何事だ！ただの鯨か何かじゃないのか！？」

ボルケーノは司令室で寝ていたらしく、パジャマのままの姿でブリッジ（操縦席）まで来た。

「ぶっ！…いい、いえ、何でもありません。レーダーで見える限り、正体不明の物体は極端に人の形をしているのです。」

オペレーターはレーダーを確認しながらそう説明した。

「すぐにガギグゲゴを出撃させる！操縦士は万が一の事を備えて、一時方向を最短距離の港へ変更！急げ！！」

そこへ騒ぎを聞いたアメシストの三人が駆けつけた。

「ガギグゴは今故障中で出せないぞ。ギャギユギヨなら別だが…」
「なら、それを出すんだ！」

そんな訳で、次郎はギャギユギヨで出撃することになった。

「敵は見てわかるとおり、水生のタイプだ。体が水で濡れているため、武器の威力は多少落ちるが、頑張ってくれ。」

「は、はい。でも、ギャギユギヨの武器って銃みたいに発射するタイプじゃなくて、ライト　バーやビームサー　ルのような離れなタイプですよ…？どうやって攻撃すればいいんですか！？」

「…あとは勇気で補えばいい！次郎、出撃せい！！」

そう言っただけはギャギユギヨを強制発進させた。

(ひ、人の命をなんだと思っっているんだ！！)

敵は間違いなくサイエンサーだった。それも、初めから巨大化しているという最悪の状況だった。

「ど、どう戦えばいいってんだよ！」

そう言いながらも、彼はギャギユギヨの光の刃を器用に使いながら上手く攻撃していた。船の方からも、ガギグゴの使える武器で援護してくれていた。敵は不規則に海中から上に出てくるが、ガギグゴは見事にそれを撃っていた。

「これで最後だ！」

次郎は大きくサイエンサーに切りつけた。刃は大きくサイエンサーの頭部に当たった。サイエンサーは水中に沈んだ。だが、それと同時に怪物は爆発を起こした。

「しまった…！奴は切られる直前に自爆したのか！？」

爆発のエネルギーで船は大きく揺らいた。

「船の安定を最優先に操縦しろ！ギャギユギヨは至急、本船に帰還せよ！！」

次郎は命令を聞くなりすぐに船に戻った。

ダクオンの乗組員はその夜、生まれて初めての恐怖を見た。

「…今…何時…だ…!？」

次郎はあの夜寝てしまつたらしく、船の中で眼を覚ました。見たところ、あの時の爆発の被害は少なかつたらしく船自体は壊れたりしていなかった。彼の隣には同じ部隊の二人が横たわっていた。おそらく人命の方も無事のようにだ。

「船は…どの位置にいるんだ？」

ボルケーノがオペレーターに尋ねた。

「…ヤバイです。」

それから彼は事態の説明をした。

「サイエンサーは自分の体に合った環境では、身体能力も極限まで向上するようになっていきます。つまり…」

「そんなのはどうでもいい！船の場所は何処なんだ!？」

オペレーターは言いづらそうに話した。

「…サイエンサーの強い爆発の影響で、船は…太平洋の何処かに運ばれました。」

「…私もよくよく運のない男だな…方位磁石は使えんのか？」

彼は首を左右に振った。どうも壊れているらしい。

「こんな…中学生がワー で書いた物語みたいな設定なんて、あるかー!!」

とにかく名も無い海に浮かんでいるのはまずいと、彼らは船を場所がわかる所まで無理矢理動かした。

「ジョン！博士！陸地が見えますよ！東京に無事たどり着いたんですよ!!」

次郎はガラス越しに見える景色を二人に伝えた。三人は確認をするためブリッジへと急いだ。が、途中でボルケーノに止められた。「特別部隊の三人!『えー!』」などと叫んで驚かないように聞いて

ほしい。我々はあの時の爆発で…遠くの海に飛ばされたんだ。だから窓から見える陸地は東京ではない。いや、日本でもない。おそらく…北アメリカ大陸だ。」

「おー！」

そう叫んだのはドツペルゲンガーだった。ボルケーノは彼に鉄拳をくらわして、彼は10mほど奥まで吹っ飛んだ。

「小野さん、僕たち…これからどうなるんですか？」

「なにしろ通信機器がミノ スキー…じゃなくて、爆発の影響で自分の間は使用できない。多分、しばらくはアメリカ合衆国でお世話になるだろう。」

しかし、ジョンは上機嫌だった。おそらく英語が使えるようになるからだろう。

「No problem！」

第七話 ベガスの戦い

ジョンがいるおかげで、アメリカへの上陸は難なく済み、一週間ほどはアメリカの対サイエンサー組織『ルビー』に助けてもらったことになった。

「やっぱり俺には日本語はむいてないんだよな。今まで覚えていたことを、全て忘れるはめになったからな。」

「やっぱり彼は外国人だな、と次郎は思った。」

「せっかくアメリカまで来たんだから、滞在している間は観光にでも行こう！」

ドッペルゲンガー博士はあいかわらず浮かれている。そんな次郎だが、今回だけは彼の意見に賛成だった。

「今だけ話に乗りますよ。滅多にこういう所には来れないし。」

「じゃ、明日から早速ベガスだー！」

ベガスというのはラスベガスの事だろう。

「ラスベガスですか？カジノなら僕たちお金持ってきてませんよ。」

「俺たちには外国人がいるだろ？初めは1セントあればいいんだ。」

俺はかなりの幸運の持ち主だからな！」

次郎はなんとなく納得した。

（…そうだろうな。あんな頭脳で今まで生きてこれただけでも、ものすごい運だからな…。）

二人は通訳としてジョンを同行させた。目的地は出発地点からはかなり遠いため、朝一で出発したのに着いたときにはもう夜に入りかけた時刻だった。

「ラスベガスは俺もまだ行ったことはないから、翻訳以外は何も出さないからな。」

「分かった、分かった。カジノを始めたらおまえらは椅子に座ってただ俺のやることをボーッと見てればいいんだ。簡単だろ？」

それから彼は裏路地にあったゴミ箱をひっくり返した。その中からはセント通貨がいくつかが飛び出してきた。

「どうしてこんなところにお金が…」

「儲けすぎて家に泥棒が入るのを防ぐため、こうやって少しずつ見えないところにコインを捨てていくバカがベガスにはいるんだよ。」

彼はそのコインを一枚拾い上げた。それにはくつきりと『1』と書いてあった。

「これが、アメシストと俺の財政を救う鍵となるんだ。よく見ておけよ！」

そしてドツペルゲンガーら三人は店を選び始めた。

「カジノってのは入る店によって運気がずいぶん変わって来るんだ。だから俺に合う運気がモヤモヤと漂っている店を…ここだ！」

彼は一つの古びれた、いかにも貧乏そうなカジノ店の前で立ち止まった。

「さあ、戦いの始まりだー！！」

「いらつしゃいませ。存分にカジノをお楽しみください。」

三人はカジノ店に入った。外見のわりには、意外と多い人が中にはいた。

「あれ？入場料とかはいいんですか？」

「こういうお金のない店は、人を来させるためにそういうものは無料になってるんだ。」

「…運気が漂ってるからじゃなかったんですか、この店に決めたの！？」

「その運気とはお金を取られるか取られないかの問題だ。」

彼はカジノ用コインとの変換所へ行った。

「では、現金を…」

受付の店員がそう尋ねたので、彼はポケットから1セントコイン

を取り出した。その時、周りの客から笑い声が聞こえた。

(おまえらが笑っていられるのは今だけだ。見ておけよ！)

彼は1セントのカジノ用コインを受け取った。

「まずは、ルーレットで勝負だ！」

ドッペルゲンガーがルーレットの席に座ったとたん、客たちは大笑いをした。そして彼を指差し何かを言っていた。

「ジョン、客は俺のことを何と言っているんだ!？」

「…繰り返し繰り返し、『バカ』と言ってるよ。」

「…こいつらの方が頭が欠けていることを俺が教えてやるっ！」

「すみませんが、僕は客の言ってる事に同感ですよ…。」

「Me too」

しかし、その意見はくつがえされる事となる…。

「なぜだ? どうしてこんなに勝っているんだ!? こんな貧乏な男が!?!」

ドッペルゲンガーと名乗る日本人は、見事に出る数字を当て、ル

レットでは大勝利を重ねていた。

「…どんな人にも才能はあるんですね…。」

「…そのようだな。」

彼の賭け事の才能は、どの競技にいたっても素晴らしい結果を出した。ルーレットの数字と色をピタリと当て、ポーカーではロイヤルストレートフラッシュを連発し、その他のマイナーゲームでも人間とは思えない運の持ち主だった。

「今日はこのくらいで終わりにしておくか。さーて、現金に換金するぞ。」

ドッペルゲンガーの持ちコインは山のように多かった。三人は店の奥にある換金所のドアを開けた。

「おまえらも少しは俺を見習えよ！」

彼自身も、今回の結果には驚いているようだった。

「お客さん、随分勝ちましたね。」

換金をしているのはその店の店長らしい男だった。その男はそう言いながら換金所の部屋のドアに鍵を閉めた。

「あれ…？どうして鍵を？」

ジョンも同じ疑問を抱いたらしく、その男に英語で何か尋ねていた。その男はこう答えた。

「なぜって？…それは…こういう事だ！！」

男は体がどんどん人間でなくなっていく。

「こいつ…サイエンサーだったのか！！」

「…ルビーのやつらか！？ああ、俺は真正銘、ブロッケンモンスターだ！俺は毎回この店で儲けた人間をこの部屋で捕獲し、我々の仲間をその人間に変態させて出している。だから捕虜が増えて増えてねえ！！」

ジョンとサイエンサーは英語で話していたため、残りの二人は何を言っているのかさっぱり分からなかった。するとサイエンサーは、ジョンにパンチを繰り出してきた。しかし、ジョンはそれをギリギリでかわし、今度はジョン側から鉄拳が飛び出した。

「うわ！」

鉄拳はサイエンサーに当たった。

「まだだ…皆の衆、攻撃だ！！」

ドアが破られ、店内からサイエンサーの大群が押し寄せて来た。

「みんなサイエンサーだったとは！！」

三人は押し寄せるサイエンサーから避けながら、店の外へ出た。

そして、店の外にはあの機会の巨人が立っていた。

「ガギグゴ？修理が終わったのか！？」

次郎とドッペルゲンガーはガギグゴに乗り、Gブラストでサイエンサーを店ごと焼き払った。

「笑った罰と騙した罰だ!!」

「ガギグゲゴ? ああ、あれはラスベガスのルビーで使われてる『コピー・ガギグゲゴ』だよ。」

それは某都市で使われているガギグゲゴのコピー、すなわち量産型のメカだ。そのコピーは某都市の唯一の本物のガギグゲゴを元に作られ、全世界、全地域の某都市以外の対サイエンサー組織本部で使われている。

「なーんだ、どつりでGブラストの威力がいまいちだった訳だ。」

「おまえらがラスベガスに行ってる事に気づかなければ、今頃タコ殴りにあっていたところだ。感謝したまえ。」

第八話 ロスの盲目ホームレス

「ガギグゲゴと船の修理は、確認したところ予想よりダメージが少なくどうか今日中に終わりそうだ。それまで、できるだけサイエンサーを呼び起こすなよ。」

ボリケーノにそう言われて、あの三人は再び観光に出かけた。

「今日は何処に行くんですか、博士？」

「そうだなあ：今日にも船が出港するかもしれないから、あまり遠いところへは行けんしな。それでいて、コピー・ガギグゲゴは普段本物のガギグゲゴに乗り慣れている俺たちには使いづらいつて分かったから、むやみに戦闘が起きそうな場所：サイエンサーがいそうな町へも無理だ。だとすると…」

「ロサンゼルスなんか、どうでしょうか？」

そう言ったのはジョンだった。

「ロス：ハリウッドの町か。悪くは無いな…。ようし、そこに行くう！」

三人はロサンゼルスへと出発した。

「ロサンゼルスって結構都会なんだなあ。」

外国を知らない二人にとってロサンゼルスの最初の印象はそれだった。

「映画の町…とは言えども、街角はニューヨークとあまり変わらないんだ。アメリカは先進国だしな。」

三人はこの日は個人で別々に活動し、夕方の5時にまたここ（駅）で集合する事になった。

「俺は、ちょうどこの辺に知り合いが住んでいるから、ちょっと挨拶しに行きたいんだ。」

「俺もせっかく来たんだから、ハリウッドスターの一人や二人はこの目で本物を拝みたいからな。見つかるかどうかは別だが。」

そう言っつてジョンと博士は行つてしまった。次郎は特に行きたい場所は無かつたので、その辺をぶらぶらしてみることにした。

（別に僕が行きたいつて言つた訳でもないから、行くところがないんだよな…。市場でも行つてるか。）

彼は物を売つている場所を探した。市場は都市化した街角には見当たらず、初めて見つけた時には、かなりの田舎まで来ていた。

（道…忘れたかもしんないな。まあ、どうにかなるだろう。）

そこは確かに日本の『アメ横』のように店が並んでいたが、所々にホームレスが新聞紙などを敷いて座つており、次郎や他の通行人が目の前を通るたびに何かを言つていた。

（みんな生きるために大変なんだな…。日本に生まれてきてよかつた。）

だが、そのホームレスの中で一人、他の人とはまったく異なる事を言う男がいた。

「…その少年、アメシストの者だな。」

彼は日本語ではっきりとそう言つた。次郎はその男の前で立ち止まつた。

「…どうして、分かつたんですか？」

彼をよく見ると、ずっと眼をつぶつていた。おそらく眼が見えないのだろう。

「対サイエンサー組織の人間は、特有の機械っぽい匂いがある。おまえはその刺激が極端に強いんだ。おそらく…ガギグゲゴのパイロットだな？」

「眼が見えるんですか？日本人だとは匂いでは分からないはずですよ。」

男は顔を上げた。

「私だつて日本人もどきなんだ。なんとなく第六感つてので分かる

のさ。」

「『もどき』?」

次郎は彼の言葉に疑問を抱いた。

「分からないか?俺はサイエンサーなんだよ。」

それを聞いた瞬間、少年はポケットにしまつてあつた対サイエンサー用の小型銃を取り出そうとした。しかしすぐに、悪心のサイエンサーだけを敵に回せ、という事を思い出した。

「言つておくが、俺は眼が見えないふりをしているだけだ。俺は変態能力が少し欠けていて、眼球がサイエンサーのままなんだ。だから盲目のホームレスを演じているんだ。」

「…あなたは誰なんですか?」

「私は…ただのサイエンサー、『アンモニウマン』さ。」

彼の人生はこのようなものだった。

十年前、彼はサイエンサーの基地から人間の世界に進んだ。彼は手に拾つた人間の雑誌の写真にあつた男に化けた。しかし、その男にはばく大な借金があり、彼はその男によく間違いられ、借金取りから酷く暴行を受け続けた。その時から彼の変態能力に異状が出始め、彼は盲目の男を演じ始めた。

彼の人態の元になつた男は、噂によるとまだどこかの都会に生きているため、ややこしいことにならないように彼はこうやって盲目のホームレスになつた。

「その男は日本人だが、まだアメリカのどこかにいる可能性が高い。そいつが死んで、この世から存在が消え去るまで俺はこの生活を続けなければならぬのさ。余談だが、俺が日本語を話せたりするのは、俺が日本生まれ日本育ちのサイエンサーだからさ。」

その時、次郎のGウオッチから音声が出た。

「次郎君、今君のいる場所のすぐ近くにサイエンサーが発生している。ロスのルビーが動いていたら間に合わない、出撃を頼む。北西に500メートルの地点だ。」

「またサイエンサーが変態したらしい。行かなければ…」

「待て！北西に500メートルといたら、強力なサイエンサーがうろつろしている場所だぞ！」

「ガギグゲゴがあるから大丈夫です。あなたには関係ないでしょう！」

「…なら、俺がついて行く！」

その場所ではいかにも強そうなサイエンサーが暴走していた。

「うわー、何あの物体は!？」

「だから言っただろう！簡単にはあれは倒せんよ。」

ちようどそこにガギグゲゴが届いた。修理が終わったらしく、今回は本物が来ていた。

「と、とにかくこれに乗ってください。早い内に倒さないと、自爆されてしまいます。」

「言われなくても分かっている!!」

二人はガギグゲゴに乗った。次郎はすぐさまガギグゲゴを變形させ、攻撃に移った。

「雷斗忍愚・舞零怒は毎回あまり効果がないから…今回はGプラストだ！」

ガギグゲゴは腕からビームを発射した。だが、このサイエンサーは無傷だった。

「ちい、直撃のはずだ！悪性のサイエンサーは化け物か!？」

するとアンモニウマンが操縦ハンドルを手に取った。

「ええい、私がやる!!」

彼はガギグゲゴの腕を下から上へものすごい勢いで上げた。サイエンサーはそれが腹に当たり、そのまま空中へと翔んだ。

「墮射・怨・座・守壊!!」

サイエンサーは10メートルほど上がった瞬間に、爆発した。

「サイエンサー…特にああいうタイプの奴は、低気圧に非常に弱いんだ。彼らは体が膨張しやすくてな。」

それは次郎もアメシストの訓練で習った事だったが、すでに彼の頭の中には存在していなかった。

「彼が…助けてくれたという男か。助太刀を感謝する。」

「いいえ、私はただのサイエンサーです。倒し方を知っていたから行動したのみです。」

「我々は今日の夜出航するのだが…可能ならば一緒に来てはくれな
いかね？」

彼は一瞬悩んだが、すぐに答えを出した。

「戦いの基本は敵を知ること…私が役に立てるならば、生きている限り協力いたします。」

また、アメシストに新たな仲間が加わったのだ。

その夜、ダクオン内に放送が流れた。それはボルケーノ直々の放送で、船の針路変更の連絡だった。

「皆の衆、よく聞いてくれ。先日、我々に恐怖と爪痕を残したあの海域は、サイエンサーが大量出沒する危険地帯だという事が判明した。したがって、我々はロシアを指し、日本海を通って自国に再上陸する。詳しいことは、私ボルケーノ小野の元まで聞きに来い。」

ダクオンはアメリカから密かに出航した。新しい隊員、アンモニウマンと共に。

第九話 掛けられたトラップ

「ア、アルマゲドンか？アルマゲドンなのか！！」

日本海側から東京まで渡ることになったガギゲゴのために、飛行可能時間を延ばせるという改造をするため、いったんアラスカのルビー基地に来ていた。そこでボルケーノ小野は、実の弟の『アルマゲドン小野』と再会を果たしていた。

「まさかこんな所で会えるとはなあ。オーストラリアの『アクアマリン』で働いていたんじゃないか？」

「3ヶ月ほど前にとばされたんだ。まあ、日本出身だから特に問題はないんだけどね。」

「どうやら彼が改造をしてくれる技師のようだ。」

「最近では農地を荒らすサイエンサーが大量出没してさ。ここんとこ長く寝てないんだよ。」

「え？おまえは技師なのか！？」

「人手が足りないんだってさ。上が言うには。」

二人はその後もう1時間あまり話していた。

「外見からは何も変わってないように見えるが、内部に細工を施しておいたから、日本海から東京なんて楽々で行けるようになった。無理をしないように使えばかなりの距離を飛べると思う。」

ガギゲゴの改造は3時間ほどで終了し、船は再び出港した。

「小野さんに弟がいたとわな。名前は同じく酷いセンスだが。」

船の中でアンモニウマンを含んだ四人は暇をつぶしていた。アンモニウマンは質問した。

「ところで、君たちは何のために東京を目指しているんだい？」

「君も知っていると思うが、『不変薬』というのを探しているんだ。」

「…不変薬か…。」

アンモニウマンは何かを知っているようだった。

「不変薬は、50年ほど前ヨーロッパで良心のサイエンサー…人態で科学者をやっていた者が作ったらしい。彼は、その薬を全世界のサイエンサーたちに感染させようとしたが、実行する直前に悪心の奴に殺された。それから薬はサイエンサー発祥の地である日本、東京の拠点に嚴重に保管されていると聞いている。」

そして彼は予想外の言葉を口にした。

「この作戦は中止した方がいい。さもなくば、全員が生きて帰れなくなる。」

「え！？じゃあ、今までの苦労はどうなるんだ？」

「命の代償だと思えば、安いもんだ。」

人間とサイエンサーとの意見の食い違いが発生した。

「私はサイエンサーだから知っているんだ。…あの基地の恐ろしさを！あそこはこの前戦ったような悪性のサイエンサーばかりだ。ほとんどがそうだと言っても過言ではない。とにかく今となっては危険すぎる。彼らは…3年前から、大いなる計画のために呼ばれているんだ！！」

「『大いなる計画』？」

次郎はオウム返しに聞いた。

「詳しくは知らないのだが、とても恐ろしい計画らしい。基地に集められたサイエンサーは、計画のためだけに召集されたから、一般的な活動は行っていない。だが、その基地に潜入するとなると話は別だ。」

しばらく四人は静まり返っていた。

「…でも、もう後戻りはできないんだ。僕は友人を救いたいんだ。アンモニウマンは次郎の熱心に押されて、納得したようだった。」

「じゃあ、その計画の考案者を倒せばいいんじゃないか！？そうす

れば行動の指示ができなくなり、集められた強力なサイエンサーは出身地へ帰り、不変薬を手に入れることができる。」

そう提案したのはジョンだった。

「どうなんですか、アンモニウマンさん？」

「…それは不可能に近い。なにしろ計画者は…ザ・ブレイカーの設立者なんだ。」

それは思ってもいない答えだった。事実、ザ・ブレイカーができたのは紀元前だと聞いていたからだ。

「彼は不老不死だ。だから、ザ・ブレイカーの設立から2000年あまり経った今でも、健康な体で生きている。」

「人間なんですか？」

「その人についても、俺は詳しく知らない。分かる事といえば、彼是不変薬と共に東京にいるという事だけだ。彼は最強だ。倒せるわけがない。」

その時、サイレンが鳴った。サイエンサーの発生を知らせるものだった。

次郎らはサイエンサーを容易に片付けた。ガギゲゴを使えたのもその理由の一つだ。今回はなんとかサイエンサーの自爆を防ぎ、船には傷一つ付かなかった。

しかし、ダクオンの乗員は何かを感じ取っていた。あの四人も…。「なぜだ！？この海域はサイエンサーの発生が非常に少ないはずなのに、このありさまだ！どうしてこの船はサイエンサーに会いやすいんだ！？」

最初にその異変を感じ取ったのは、珍しくドッペルゲンガーだった。

「確かに、ここんとこ戦いっぱなしだ。東京付近では水生サイエンサー、ロスでは悪性のタイプ、そしてカジノ…は関係ないか。」

ジョンも感じていたようだった。

「…この作戦がやつらに知られている！？」

そう言ったのは次郎だった。そして彼はサイエンサー基地にいた時のことを思い出した。

「…あの時だ。あの時の司令官が知らせたんだ!!」

「やつは僕らが不変薬を探しに来ることを予測して、わざとそれの事を僕に教えたんだ。僕らは…畏にはめられたんだ…東京に着くまでに、待ち受ける刺客に殺されるんだ!」

「次郎、大丈夫か? 落ち着け!」

次郎は少々狂気い達していた。それは、迫り来るサイエンサーの恐怖と、死の不安だった。

「確かに、サイエンサーは全世界に基地を持っている。通信等で、その司令官が僕たちの動きを伝えて、見つけたら始末しろと命令してもおかしくない。世界中のサイエンサーの標的になったんだ、この船は。」

四人の心は恐怖に満ちた。

ダクオンは燃料の補給及びガギゲゴ等の整備のため、一度ロシアに入港した。

「アメリカの次はロシアか! 世界一周しちまいそうだな。」

「僕は一度しましたよ、自由ではなかったけど。」

ロシアの対サイエンサー組織『エメラルド』は、コピー・ガギゲゴを開発した事もあり、裏世界ではトップの工業国だ。

「最近、悪性のサイエンサーが多く発生してましてな。まあ、我々の技術で楽々と粉碎ですがな、ハハハ。」

エメラルドの長官らしい男はそう自慢していた。

「補給が終わるまで一時間ほど時間がある。各員はその時間でロシア観光などを楽しんでいたまえ。ま、そんな時間で行けるのはこの

港の近辺だけだな。」

ボルケーノはのんきにそんなことを言っていた。

「さてと、ロシアって…なんかあったっけ？俺らは寿命がどんどん縮まってるから、早めに思い出をつくつとかならんのに。」

「博士、縁起でもないこと言わないでくださいよ。そんなこと言うと、RCが『その時、Gウオチが鳴った。』とか書きちゃうじゃないですか。」

その時、Gウオッチが鳴った。

「ポイント6690だ。また悪性のタイプらしい。出勤を願う！」

「地元、ロシアのエメラルドに任せればいいんじゃないんですか！？」

「…お前がガギゲゴの主人公だろ！頼んだぞ！！」

Gウオッチの通信はそこで途切れた。

（言ってることが無茶苦茶だ！…悲しいけど、これって運命） R
Cの都合）なのよね。）

次郎とドツペルゲンガーはサイエンサーの出現地点へ向かった。

そこには一体のサイエンサーが待っていた。

「貴様が…噂の少年か。私はナトリウマン、創生者の右腕だ！」

第十話 強敵、ナトリウマン

「君の話は某都市の司令官から聞いている。…君の粉碎命令もな！」
サイエンサーはそう言いながら、二人の方へ突進してきた。ドッ
ペルゲンガーは悲鳴を上げながら逃げ、次郎は届いたガギグゲゴへ
飛び乗ろうとした。しかし、ナトリウマンは標的を失って進んだも
の、すぐに方向転換をした。

「させるか！！」

ナトリウマンはジャンプをしてガギグゲゴの前に立ちはだかった。
(今日の敵は…いつもと違うぞ！)

ともかくガギグゲゴに乗らないと倒せないので、次郎はサイエン
サー用の小型銃を取り出し、目の前の敵に撃った。

「ちい！ならば…！！」

彼は見る見るうちに巨大化した。

「見せてもらおうか、アメシストの…本物のガギグゲゴの性能とや
らを！」

次郎はガギグゲゴを起動、変形させた。

「博士はじゃまだからどいててください！こいつは僕がやります！

！」

「『僕が』って、私ができるわけじゃないか！！…とにかく、
頼んだぞ。」

彼はスタスタと帰っていった。

「さあ、来い！ナトリウマンだが、ナメクジマンだか知らないが、
ガギグゲゴさえあれば敵ではない！！」

次郎はコックピット内でそうつぶやいた。それが聞こえたのか、
ナトリウマンは再び突進してきた。

「今だ、Gブラスト！」

しかし、Gブラストのビームをもるともせず、ナトリウマンは
ガギグゲゴにぶつかった。

「ぐわあ…！」

ガギグゲゴは地面に倒れ、次郎はパニックに陥った。

「まだまだ！次はアンモニウマンに教えてもらった必殺技だ、喰らえ…！」

ガギグゲゴは上にのしかかっていた敵を足を大きく動かして振り払った。サイエンツサーはその力で上空へ舞い上がった。が、ナトリウマンは無事地上へ戻ってきて、その上ガギグゲゴの真上に落ちてきたために次郎は再度大きな衝撃が与えられた。

「あいにく、私は悪性のブロッケン・モンスターではなくてな。この力は…自分の力で手に入れた物なんだよ…！」

次郎は、一般性（普通のサイエンサー）であつてもトレーニングをすれば悪性なみに強くなれる、ということ思い出した。ガギグゲゴはナトリウマンに数度踏まれ、ボロボロになっていた。

「…一体…何の恨みがあつて…」

そこで次郎の意識は途切れた。

（ここは…何処だ！？…って、前にも一回言つたよ…な気が…。）

次郎は目を覚ました。そこはダクオンの船内だった。

「…次郎、大丈夫か？生きていてよかつたよ。」

ジヨンの声が目覚めたばかりの耳に響いた。

「僕は…どうなつたんだ？」

戦闘で役に立たなかつたドツペルゲンガーが説明をした。

「さつさと逃げた俺が言うのも変だが…おまえはサイエンサーに負けたんだ。ナトリウマンが命を奪う前に、エメラルドのやつらが駆けつけて、敵は素早く逃げちまつた。ガギグゲゴは今や再起不能状態。修理にはかなりの時間がかかりそうだという理由で、俺たちの作戦は一時中止。今、船は日本海を通つて某都市へ向かっている。」

「…僕のせいだ。もっとしっかりしていれば…！」

アンモニウマンは失敗を悔やむ彼を慰めた。

「気にするな、誰でも失敗はするさ。それに、ナトリウマンといえばサイエンサーの中でも5本の指に入るほどの強さだと聞いたことがある。負けて当然、生きて帰ってこれただけでもすごい事なんだ。」

それでも次郎は責任を感じ続け、何も言えなかった。

「とんだ災難だったな。まあ、チャンスならいくらでもある。ガギゲゴが直り次第、また計画を立ち上げよう。」

ストックホルムは失態をした次郎を責めなかった。

「みんな僕の責任です。…恨んでくれてもいい。」

次郎は部屋を出た。ドツペルゲンガー博士はまだ中にいた。彼はストックホルム大佐に向かって土下座をした。

「すみません、大佐！私が何の役にも立てなかったから、次郎は…」

「いや、博士が謝ることではない。」

「は、『博士』!?!」

「君が戦闘に加わっていたら、よけいにガギゲゴと次郎君に被害が及ぶところだった。よって、次郎君の障害物にならないようにした君の行動は適切だ。心から感謝する。」

「…うれしいような、悲しいような…」

次郎は偵察の任務に戻った。計画を実行していた間、彼は風邪で休んでいた事になっている。なんでも、大佐の知り合いに中学校の教員がいるらしい。彼はうつむきながら登校した。やはり、先日のことが頭から離れないでいた。

「僕は…あのサイエンサーに勝ちたい…!」

(こうしている間にも、世界中からサイエンサーたちが消えていく

…。

中学校の廊下。次郎は今まで以上の不安に襲われていた。

（一人のサイエンサーが死ねば、その時戦った世界各国のガギゲゴから超音波が出され、一般民からその怪物の記憶が抜き出され、消去される。組織はそれを繰り返して、地球の平和を守っているが…それでいいのかわ？存在がなくなつたとしても、つい数分前までは誰かの大事な人だつた人間だ。…決して気持ちのいいものではない！）

次郎は前にもこうやって考えたことがあつたことを思い出した。

（不変薬！不変薬さえ手に入れば！！）

その時、彼は後方から気配を感じた。

「次郎君。悩みなら、話になるよ。サイエンサーの私でよければな。」

それはサイエンサーの松永先生だつた。彼は、すでに自分の正体が少年に知られていることに気づいていた。

「私は最初から知っていた。君がアメシストの偵察員である事も、この数日間何をしていたのかも。」

彼の言葉はいやみに聞こえた。

「君は私を悪心のタイプだと思っているだろうが、それは違う。ちなみに、君は一度私を尾行した事があつたが、あの時は本当に出張の用事があつたんだよ。」

しゃべり方といい、雰囲気といい、次郎が感じる限り今までの松永とは別人に思えた。

「…あなたは心の中でも見えるんですか？」

「サイエンサーには、ごくまれに特殊能力を身につけた者が誕生することがある。私のように。」

松永はあたりを見回した。

「教えてください。悪心でも良心でもいいから、助ける方法はないんですか？」

徳永は再び次郎のほうを向いた。

「…時を待つんだ。今の君には不変薬しか手はない。それまで、多くのサイエンサーが変態をしないよう願ってるんだ。」
そう言っただけは去っていった。

1ヶ月後、ガギゲゴの修理が完全に終了した。その1ヶ月間、何人も次郎の友人が犠牲になった。もう彼は待ちきれなかった。

「これより第二次不変薬奪取作戦を行う。前回の事もあるので、各員気を引き締めて行動するように！」

ボルケーノは前会った時と何の変わりもないようだった。作戦には、一度イギリスに帰国したジョンも再び参加してくれた。そして、アンモニウマンも。隊員は太陽の下で成功を固く誓った。

第十一話 ロシアの天才

ダクオンは危険海域に近づかないように、日本海の港から出発した。しかし、なぜか船はロシアへ向かっていた。

「小野さん、どうしてこの進路を？」

「おまえには強くなる必要がある。前のナトリウマン以上のサイエンサーだってきつと現れるはずだ。」

確かに、彼は強くなりたかった。いや、強くならなければならなかった。

「これから行く場所に、コピー・ガギゲゴの開発を受け継いだ技師がいる。おそらく、彼が一番ガギゲゴの事を知っているはずだ。そいつに、戦い方を学べ！」

次郎はやつと納得した。

「この道をまっすぐ行くと、一軒の機械工場がある。そこを訪ねる。彼は日本語を習得していると聞いているから、君一人で十分だろう。」

そのボルケーノの言葉を最後に、次郎は歩いていった。

（この先に…例の技師が…。）

その工場は成金の豪邸のようだった。次郎は扉を開けた。

「ごめんくだ…誰もいないじゃん。」

外見の割には中はやけに薄暗かった。工場内にはいろいろな金属と、その加工道具が設置してあった。奥には、ぼんやりとコピー・ガギゲゴが置いてあるのが見えた。

（さすがコピーの開発者だ。それなりの雰囲気は…あれ！？）

工場のあちこちに、さまざまな種類のガン ラが飾ってあった。

（…何かに使ってるんだな。きつと。絶対に。）

その時、前方のドアが開いた。

「君が山田次郎か…？話は聞いている。敵を倒したいのならば、こっちに来るのだな。」

次郎は部屋に入った。中にはさっきまで見ていた以上のガンラが置いてあった。それも全てシャ専用機のキットだ。彼は後ろを向いて立っていた。

「あなたが…コピー・ガギグゲゴの開発者ですね？」

「開発？それは私の先祖が始めた事だよ。私はそれを受け継ぎ、新たな機体を生産しているだけだ。」

彼の姿は影になっていく見えなかった。

「教えてください、ガギグゲゴの使い方を。」

次郎は尋ねた。

「…よからう。しかし、ガギグゲゴには謎が多い。故に、完全に力を引き出す方法は私にも分からないのだよ。私の名はRC、ただの技師だ。」

（RCといえば、この物語の作者で適当なセンスでガギグゲゴを作った人…いや、そういうこと言うのはやめとこう。ストーリー中ではこういう設定なんだな…。）

次郎は訳の分からない疑問を抱いていた。

「ガギグゲゴの最大の謎…それは全身にちりばめられた発光体だ。」

そう言っつてRCと名乗る技師は扉の奥に見えるコピー・ガギグゲゴを指差した。彼は次郎の方を向いたが、いまだに暗闇のせいで顔がよく見えないでいた。

「発光体…あの緑色の（画像参照）？それがどうかしたんですか？」

RCは説明した。

「あれは、今までに何人も技師たちが研究してきたが、完全には機能が解明されていないのだよ。故に、コピー・ガギグゲゴは原型より劣っている。」

「機能：ですか？僕は強力なソーラー電池の役目だと聞いています
が。」

「そうだ。だからこそ、ガギグゴは壊れていない限り永遠に戦い
続けることができる。だが、発光体には他にもさまざまな能力が隠
されている。その中の一つが…君のための機能だ。」

彼は再び後ろ向きになった。

「ガギグゴの性能は、パイロットの精神力によって向上する。」
「精神力？」

「ああ、そうだ。簡単に言うと、『心の強さ』だ。どのくらい、目
の前の敵を倒す勇気があるか。どれほど、倒さなければならぬとい
う決心がついているか。それが君の戦果を大きく左右する。」

「で、でも、僕は決心は初めから…」

「君は油断していたのだよ。絶対に倒せるという安心感が、心を弱
くしていた。」

次郎は大きく精神的ダメージを受けた。

「一言、ぶっちゃけて言うておく。君はまだ未熟なのだ。今までの
勝利は君の勝利ではない、全てガギグゴの元の性能のおかげだ。
それを忘れるな。」

そこで会話は終わった。次郎は礼を言うと、さっさと工場から出
た。

(心の強さか…。僕はもう、負けない!!)

次郎が道を歩いてからしばらく経った。Gウォッチが戦いを始まら
せた。

「次郎、またサイエンサーだ。出れるか？」

彼はもう答えを決めていた。

「山田次郎、出撃します！」

「また会ったな、山田次郎。」

そこにいたのは、この前ガギグゴをコテンパにし、作戦を延期
させたナトリウマンだった。

「僕も、会いたいと思っていたところだ。さあ、勝負だ！」
宿命の対決が始まった。

「先行はもらった！」

ナトリウマンはいきなり動き出し、巨大化した。次郎はガギグゲゴに乗ると、すぐに変形させた。

「勝てると思っなよ！」

ナトリウマンは手の触手を伸ばし、ガギグゲゴの全身に絡み付けた。次郎は動けなくなってしまうた。

「そんなもの！僕は…変わったんだ！！」

彼はガギグゲゴを動かし、触手を引きちぎった。それはものすごいパワーだった。

「ならば、これはどうだ！」

敵は近づき、ガギグゲゴにパンチを喰らわせた。次郎にはかなりの衝撃が加わったが、ガギグゲゴは倒れなかった。

「まだひるまないのか!？」

次郎はガギグゲゴの腕部にギャギギョを装着させた。ギャギギョギョからビームが放たれた。

「雷斗忍愚・舞零怒!!!」

機会の巨人は怪物を一刀両断した。

「更に行けるようになったな…少年よ、地獄で会おう…!」

ナトリウマンは爆発した。その時の光の影響か、余計に空が明るかった。

「次郎、よくやった！本当に強くなりやがって！」

次郎は特別部隊のメンバーに、暖かく迎えられた。

「ガギグゲゴの性能のおかげです。僕は…ただ乗っていただけです。」

彼は技師に伝えられたことを言った。その時、その技師のシルエツトが眼に入った。彼もここに来たらしい。

「RCさん、あなたは僕の恩師です。」

「そういう言い方はやめてくれんかね。君はまだまだ強くなれるのだから。」

彼は影に入っていたため、やはり姿はよく見えなかった。

船はその日の夜、出航した。港には例の技師もいた。

「さようなら、RCさん。またいつか、会いましょう！」

次郎が船の窓から手を振ったとき、船内に一枚の紙が入ってきた。それはRCの物だった。

「こ、これは…」

「私の開発した新しい機体の使用許可書だ。ここは近く…中国の領域だが、その基地に保管してある。まだ試作機だが、きっと役に立つだろう。さらばだ、少年！」

船はロシアを出て、急遽進路を中国へと変更した。

第十二話 ジョン、出撃す

「使用許可書を確認する。…よろしい、中に入れ。」

ダクオンは中国の対サイエンサー組織、『サファイア』の基地に来ていた。理由は勿論、新たな兵器の受け取りのためだった。

「例の機体は一番奥にある。それ以外は、絶対にいじったりするな。」

担当のサファイア隊員は厳しく言った。次郎ら特別部隊のチームは兵器保管庫に入った。

「うわー。さすが天才の倉庫だな。」

中には数十体のコピー・ガギグゲゴが置かれていた。

(じゃあ、ガギグゲゴ工場のあのうらやましいほどの多量のガンラはこのことを伝え…いや、それはない。何の意味もないし。)

彼らは奥へと進んだ。とても長い距離を歩いたな、と思った頃、その機体は現れた。

「これが、RCさんの言っていた試作機か。」

それはガギグゲゴの半分の大きさのロボットだった。形状からはガギグゲゴと同じく変形機構があることが想定できた。そして、ヘッドはギャギユギョのような一つ目だった。そのことから、ギャギユギョの兄弟機だと分かった。

「…いつの人も、考えることは一緒なんですね…。」

「しかたがないだろ。RC(作者の方)は、自分が作った完全オリジナルの作品には、やたらにギミックをつけるんだ。平凡なモノは作りたくないんだとさ。」

「あなた、作者の何なんですか？」

隊員は速やかに兵器を船へ搬送した。

「ところでこれ、誰が乗るんですか？僕はガギグゲゴだし…まさか博士！？」

「俺を殺す気か！俺にできるのはボタンを押すことぐらいだぞ。」

「…俺が乗ってみるよ。」

名乗り出たのはジョンだった。

「コピー・ガギゲゴの操縦訓練をトパーズで受けたことがある。

実戦は未経験だけど。」

新兵器『ギャギユギョ・N』^{ナイト}のパイロットは思ったより簡単に決まった。

ダクオンは目的が済むと、すぐに母国日本へと向かった。

「途中でまた水生サイエンサーに会わなければいいがな。もう失敗はこりこりだ。」

「僕だつてそうですよ。それもナトリウマンみたいなクソ強い奴が…」

その時、またしてもサイエンサー発生のシグナルが船内に響いた。

「…やっぱり来るんですね。一話に一体は必ず…。」

次郎はすぐさまガギゲゴを出撃させた。だが彼は、現れたサイエンサーの姿を想像することはできなかつた…。

「さあ、勝負だサイエンサー…って、いなくね？」

ガギゲゴの画面からも、レーダーからも、それらしき物は見えなかつた。

「小野さん、敵は何処ですか？肉眼からは確認できないんですが…。」

「今オペレーターが確認しているところだ。何だつて…まだ巨大化していない!？」

それはアメシストとザ・ブレイカーの戦いの歴史の中でも、特に珍しいことだつた。

「…なら出撃要請はいらなかつたんじゃなかつたんですか？そんな

敵なら、放っておいても大丈夫…うわ！」

次郎はガギグゲゴを通して振動が伝わってくるのが分かった。

「大丈夫じゃありません！サイエンサーは、その小さな体を生かして、船上に上がっているんです！！ああ、ガギグゲゴが！！！」

敵はガギグゲゴの下半身の装甲を鋼の爪で破壊し、中の回路をむしっていた。

「この野郎！Gブラ…」

「駄目だ！こんな近距离で撃ったら、当たっても失敗しても船もろとも爆発するぞ！ガギグゲゴの大きさを考える！！」

その時、コックピットから外の状況を映していた画面が、アナログテレビのゲームとかをしてない時の2チャンネルのようになった。おそらく、サイエンサーの攻撃でイカれてしまったのだろう。

次郎は、通信回路が無事のうちにボルケーノへ話しかけた。

「小野さん、このまじやまた敗退しますよ。何か方法は…そうだ、ギヤギユギョ・Nを出してください！」

「新しい機体か！？」

「それなら小型機だから、攻撃の命中率も高く、万が一外れても損傷は削減できます。」

「…分かった。すぐにジョンを呼ぶ。」

「急いでください！」

「ジョン、参上！って、何をすればいいんだ？」

さすがに初陣のジョンは自分の行動に戸惑っていた。

「とりあえず、これを撃…」

そこで通信が途切れてしまった。

「…まあ、適当にやっとくか。とりあえず変形させないとな。」

ジョンは運搬時にロボットモードからビークルへ変形させたギヤギユギョ・Nを再び戦闘体形へ戻した。機体は名前の通りナイト（騎士）のように右手に剣、左手に盾を装備しており、背中には高機動ジェットがついていた。

「ジェット？ようし、使ってみるか！」
ジョンは空へ舞い上がった。

「落ちろ、落ちろ！！」

次郎はガギゲゴの体をゆすり、サイエンサーを振り落とそうとしたが、敵は爪を装甲に刺さったままで、ビクともしなかった。

「次郎、今行くぞ！」

ジョンは自分の機体でサイエンサーにぶつかっていった。サイエンサーはいったんガギゲゴからは離れ、新しいメカを確認した。

「武器は無いのか、武器は？…キル・ソード？ようし！」

ジョンはギャギユギョ・Nの右手の剣でサイエンサーを切り落とした。サイエンサーの左手は跳び、同時にあの爪も海に沈んだ。

「あとは俺に任せて、ジョンは退いてくれ。」

画面はまだ破壊されたままだが、攻撃はできるようになったガギゲゴの次郎は反撃に入った。

「雷斗忍…」

「待て！そこはジョンにやらせる。大きさは変わってないんだぞ！！」

そうボルケーノが止めた。

「ちょ、通信は不可能じゃなかったんですか！？設定おかしいですよ！！」

「どうでもいいから、早くしてくれ。」

「…頼んだ、ジョン。」

次郎はしぶしぶ後退りした。

「これでいいのかな？『ストライク守妬頼苦・バースト刃亜棲賭』！！」

剣からビームが発射され、サイエンサーを直撃した。その瞬間、船は大きく揺らいた。

「…剣だと思っていたが、銃にもなるとは…。RCめ、よく作った

ものだな。」

ボルケーノはそれを見て漠然としていた。

「小野さん、まさかさっきの衝撃でまたどこかに飛ばされた、って事はないですよね？」

戦闘終了後、次郎は念のため聞いてみた。

「んー、ここは話を膨らますためにはそうしたいところだが、これは『超リアルロボットストーリー』だからそういう訳にはいかないんだよな…と作者は言っていたがな。多分、無事だろう。」

「っーか、もう超リアルでもなんでもない気がするのは、僕だけでしょうか？」

その日のうちに、船は何事も無く日本海の新潟港へ到着した。最近出番の少ないアンモニウマンの話によると、不変薬が保管されているサイエンサー基地は東京郊外にあるらしい。特別部隊はガギグゲゴ及びギャグユギョ・Nをその基地の最寄アメシスト基地へ移動させた。そして、隊員は作戦決行予定時間までにその基地へ集合し、その間短い休養を取る…はずだった。

第十三話 戦場は群馬（前書き）

ギヤギユギョ・Nの画像URL

http://blogs.yahoo.co.jp/eienn
niyakkaimonno/334060.html

第十三話 戦場は群馬

次郎、ジョン、アンモニウマン、そしてドツペルゲンガー博士の四人は鉄道を利用して東京都へと向かっていった。

「博士、これも経費削減のためなんですか？」

「…とりあえずそういうところだ。新幹線は座席代が馬鹿に高いからな。」

電車は群馬県高崎駅に着いたところだった。

「悪いが、俺はちよつとここで降りる。」

「え!？」

そう言っただツペルゲンガーは席を立った。

「言わなかったっけ？俺はここ出身なんだよ。」

「でも、一応今は作戦中ですよ!？」

「時間までに基地へ着けばいいんだろ？実家に用があるんだよ。じや、アンモニウマン。ふたりの子守を頼んだぞ。」

「そんな無責任な!待つ…」

その時ドツペルゲンガーはすでにホームに出ていた。ドアが閉まった。

「…まったく、のんきな人だな。」

三人はあきらめて東京を目指した。

「懐かしいなあ。何十年ぶりだろうか。」

駅を出たドツペルゲンガーは一人思い出に浸っていた。

「アメシストに入ったとたん、人が足りなくて困ってるから、って某都市に飛ばされたからな。さて、家に向かうか。」

彼は適当にタクシーを捕まえ、乗り込んだ。

「博士、無事かなあ…。」

「次郎は心配性だな。彼だって大人だろ、気にするな。」

電車は埼玉県に突入していた。

「でも、博士は子供の頃、学校の遠足ではぐれてしまい宇都宮まで歩き続けた経験があるって聞いたことがあるんですが…。」

「だめじゃん。」

「大丈夫ですよ…群馬出身って言ってたし。」

「…多分。」

辺りが沈黙に包まれた。

「…やっぱり僕、行ってきます。あの人を一人にはさせられません。上野で待っていてください。」

次郎はドツペルゲンガーを追い、高崎駅へと逆流した。

「お客さん、あまり見かけない顔ですね。」

「ああ。しばらくの間上京しててな。…上京とは違うか。」

博士は目的地へと無事向かっていった。

「この辺も随分変わりましたね。今じゃ東京や大阪とあまり変わりませんよ。」

タクシーの年老いた運転手は長々と世間話を続けた。

「戻ったのはいいものの…どうすれば博士に会えるんだ？」

高崎駅にはすでに彼の姿は無く、次郎は自分のとつた行動に少々後悔を感じていた。

「…そういえば、ロサンゼルスに行った時ちゃんと博士は帰ってきたような…。何やってんの、俺!？」

彼は再び駅の中へ入っていった。

「ここですね、お客さん。」

「どうも、どうも。」

タクシーはドツペルゲンガーの実家に到着した。

「えーと、代金は…」

彼は財布を取り出し、お金を数えた。だが、そこにはタクシーのメーターの数字を満たすほどの量の数字が存在していなかった。(やべえ…東京へ行くための交通費しか持ってこなかったんだ。どうすつか…)」

ドッペルゲンガーはとりあえず運転手に事情を説明した。それを聞いた運転手は、様子が少し変わった。

「そうでしたか…。いや、別にかまいませんよ。」

「…へ!？」

「お金は必要ありません。私が欲しいのは…あなたです!」

「認めたくないものだな…異郷ゆえの過ちというものを…。って、ここは何処だー!！」

次郎は高崎駅内で道に迷っていた。その時、左手の小型機械から音声が発せられた。

「山田次郎、ドッペルゲンガーからサイエンサー発生のシグナルが出ている。一緒じゃないのか?」

「え!? そんな…彼一人だとサイエンサーに完全敗北じゃないですか! すぐに行きます、場所は何処ですか?」

「92005だ。高崎市のコピー・ガギグゲゴをよこすから、それに乗ってくれ。」

「了解!！」

次郎は博士を救いに向かった。

「うー、…ここは何処だ? おまえは…」

「私はカルシウマン。ようこそ、このすばらしき研究所へ。」

ドッペルゲンガーが目覚めたのは、理科室のような場所だった。

そこにはタクシーの運転手だったサイエンサーが試験管片手に何や

ら実験をしているようだった。

「俺をどうする気だ？仲間にはもう知らせたからな！」

「…だが、君の居場所を突き止めるためのGウォッチは、ここにはもう存在しない。」

その言葉を聞くなり、彼は左手を確認した。しかし、そこには腕に残ったあとしかなかった。

「は、謀ったな…運転手！！」

「謀った！？私は自分の仕事をしているのみだ。大いなる計画のため、あのお方に奉公するために。」

「大いなる計画？」

「仲間にブロッケン・モンスターがいるのなら知っているだろう？。私は計画の遂行のため、ここで日々新たなブロッケン・モンスターを開発しているのだ。アレを見よ。」

そう言っただけでカルシウマンはドッペルゲンガーのそばのピンを指差した。その中には、小さなサイエンサーが微生物のようにぎっしり詰まっていた。

「この子たちにはエサがない。幼児期のブロッケンモンスターには、人間を食わせると将来強力な力を持つといわれている。その人間を採取し、調理し、与えるのが私の役目だ。」

「俺を食わせるのか？…今までに何人殺した！」

「殺したわけではない！犠牲になってもらったただけだ。決して無駄な死にはならない！！」

「貴様らの目的は何だ！？」

カルシウマンは眼を光らせた。

「…いいだろう。どうせ死ぬ身だ、この際教えてやる。私たちの真の目的、それは…」

「そこまでだ、サイエンサー！！」

突然声が響いた。次郎だった。

「何！？何故ここが分かった！！」

「それは…博士の足跡だ！！」

サイエサーは男の履いている物を確認した。彼は、事もあるに今どきは誰もはかない『下駄』を履いていたのだ。

「Gウオッチが置いてあったタクシーから一直線に伸びていてな。

1キロほど歩いたら、ここにたどり着いたのさ。」

「…ならば…戦いでけりをつけようぞ!!」

サイエサーは巨人に変わっていった。次郎も、すかさず博士を連れてコピー・ガギゲゴのコックピットへと向かった。この戦闘は10分ほどで勝負がつき、カルシウマンは次郎のGブラストを受けてあっけなく破壊された。

第十四話 山手線の攻防

「おまえ、タイミングが悪すぎるぞ！もうちょっとで敵の秘密を聞きだせるところだったのに……。」

「何言ってるんですか！？僕は命の恩人ですよ！！」

「恩人は俺の下駄だ！！」

死から救われた博士は、そんなのきな事を言っていた。

「第一、作戦中に実家によるという思考回路がどうかしているんですよ。今後、作戦が無事終わるまで勝手な行動は厳禁です。」

「えー、山手線に乗ったら秋葉原で暇をつぶそうと思っていたのに……。」

「暇じゃありません！！」

四人は上野駅に到着していた。そこで山手線に乗り換え、彼らは目的地への私鉄を乗り継ぐと、ささやかな計画を練っていた。

「我々は秘密組織の隊員なんです。故に、サイエンサーに遭遇しやすい、狙われやすいんです。それを少しでも防ぐために、専門用語の使用や、怪しい行動はできるだけ控えているのです。」

「いや、そういう君が一番危険だと思うんだが……。」

「何か言いましたか？」

「い、いいえ、何も言っていないせん。」

「…要するに、人口密度が多い、すなわちサイエンサーの数も大量な都心部では、特にそれに気をつけてください。分かりましたね！？」

「は、はい。」

大人への少年の説教はそこで幕を閉じた。

「博士の一件もあり、集合予定時間まであまり余裕はありません。急ぎましょう。」

四人の少年、ホームレス、おっさんは、山手線に乗った。

「なあ、次郎。20分、いや、5分でいいから、秋葉原に寄らせてくれ！頼む！！」

ドッペルゲンガーは満員の山手線の車両の中でそう呟いた。だが、次郎はそれを聞いた瞬間、彼の足を踏みつけた。

「いつ！や、やったな！！教官にもやられた事がな…」

「それが甘ったれなんです！仕事中に趣味の店に行く会社員など、どこにいるものですか！！」

その時だった。まわりの乗客たちが、全員四人の方を向いた。

「な、何だおまえらは！見せモンじゃねえぞ！！」

その客の中の一人、おそらく行きつけの秋葉原の店に向かっていらっしゃる秋葉系オタクの男が、だんだんサイエンサーへと変わっていった。それにつられてか、他の乗客も全員サイエンサーへ変態した。

「この時を待っていた。憎きアメシストの人間がここに来る事を！ここは動くブロッケン・モンスター基地、『悪夢の山手線最後列車』だ！！」

「き、基地だつて！？」

「ああ、そうだ。今や君らはふくろのネズミだ。さあ、どこへ逃げる？」

サイエンサーたちは迫ってきた。ちょうど御徒町駅から出たばかりだったため、扉は1分ほどあきそうになかった。

「なら…こうだ！！」

ジヨンはお得意の格闘でサイエンサーたちに蹴りを入れた。だが、数が数のためいくらやってもきりがなかった。

「次郎、どうする！？このままじゃ…」

「…横が駄目なら…上だ！！」

次郎は天井に小型銃で穴を開けた。次の瞬間、辺りに煙幕が現れ

た。その煙が消え、様子をはつきり確認できるようになった時には、すでにサイエンサーの前からターゲットは消え去っていた。

「し、しまった！逃がすものか…追え！！」

サイエンサーの軍団が同じく上へ向かった。

「博士、意外といいもの持っていたんですね。見直しましたよ。」
煙幕の発生源の装置は、ドッペルゲンガーの物だった。

「火事の時の煙を寄せ集めて作ったんだ。苦労したんだぞ。」

「…まさか、家が燃えて生死を分けた救出活動が行われている大変な時に、あなたはのんきに煙を採取していたのですか！？なんて事を…」

「ま、いいじゃないか。俺らが救われたんだし。」

「…それもそうですけど…てか、ここ風強すぎ。」

そこへ、先程のサイエンサーたちが再び現れた。

「もう逃がさんぞ！覚悟しろ！！」

その時、電車が秋葉原駅に着いた。

「よおし、この際だから秋葉原へいったん逃げ込もう！」

「えー…まあ、仕方ありません。行きましよう。」

四人は電車から秋葉原駅のホームへ飛び降りた。

「とりあえず、超音波発生装置を電車に設置しておいたので、いまのところは問題ないと思います。…アンモニウマンさん、何なんですか、アレ？」

「都市伝説的なもので、私も聞いている。まさか本当に存在していたとはな。」

特別部隊の隊員は、駅の某喫茶店で一服していた。

「『悪夢の山手線最後部車』、捕虜採集と敵の殲滅を目的とした、とても恐ろしい基地だ。」

「人間が入ってくるなり、様子を伺って隊員かどうか確かめ、その答えによって異なる方法で基地まで持っていくらしい。死者が出たという話も聞いた事がある。」

アンモニウマン説明が終了した。その時だった。ホームの方向から建物が壊れるような音がした。四人はすぐさまそこへ向かった。そこには、巨大化したサイエンサーが駅を壊していた。おそらく、山手線で戦ったうちの一人だろう。

「もうこんな生活はうんざりだ！山手線でちまちま仕事をしながら安い報酬で生きるのに飽き飽きしたんだ！だから、こうやって一気に人間を稼げば楽に暮らしていけるんだよ！！」

サイエンサーはそんな事を言っているらしかった。付近には巨大化していない他のサイエンサーが彼を説得しているようだった。

「…サイエンサーも、大変なんですね…。」

「そんな事考えてる暇があったら、さっさとアメシストに連絡して機体を持ってきてもらえ！」

ドッペルゲンガーは珍しく真面目にやっていた。

「…なんか、あんまり倒したくないな…。」

次郎は先程の言葉のせいで、サイエンサーに攻撃しづらくなっていた。

「次郎、どうした！？さっさと撃破して、基地へ向かおう。時間はないんだろ？」

博士の呼びかけに対しても、次郎は無反応だった。その瞬間、彼は新しい自分に覚醒してしまったのだ。

（そりゃあ、悪心のサイエンサーを野放しにはできない。でも…彼らにも人生ってモノがあるんだ。サイエンサーだって、自分で選んで悪心のタイプになったわけじゃない。…闘争本能に従っているだけなんだ。彼らは悪心のタイプのやり方で生活している。これがその証なら、僕は彼らをむやみに殺せない！）

それは今まで一度も考えた事のない想いだったが、次郎にとつても深刻な問題に思えた。

「何やってんの！早く倒せ！！」

「…博士、僕にはできません。もう…戦えないんです！！」

その時の彼にとつて、博士の助言は恐喝になってしまっていた。

「何を言っているかさっぱり分からん！もういい、私に貸せ！！」

ドッペルゲンガーはコックピットによじ登ってきた。そして、次郎の隣の操縦席に座ってGブラストの発射ボタンに手を掛けた。

「や、やめる…！！」

次郎は博士の手を叩き、その反動でコピー・ガギゲゴの電源が切れてしまった。敵のサイエンサーはそれを見るなり、コピー・ガギゲゴに襲い掛かってきた。その時、後から駆けつけたアメシスト隊員の機体により人々は九死に一生を得た。

第十五話 再会、父母よ

「軽い精神崩壊だ。リハビリ…というか、改めて学ぶ事を学んで新しい気分になれば、また戦えるようになるだろう。だが、しばらくの間は安静にしておくことだ。」

戦闘時の事もあり、念のためにとアメシスト基地の医務室で診断を受けさせられた次郎は、担当の男にそう言われた。

「次郎、しっかりしてくれよ。お前が戦わないと、何も始まらない…終わらないんだ。」

「…うん、やってみるよ。あの時、ちょっとおかしくなっていたみたいだ。」

次郎の覚醒状態は次第に薄れてきていた。

「こつこつと事って、俺たちみたいな人間にはよくある事なんだってさ。…考えてやったんだろ？敵の事をさ。」

「今はあんまりそういうことを言わないでくれ。また、同じ状態に戻ってしまいそうなんだ。」

そこへ、彼に代わって診断結果を詳しく聞いていたドツペルゲンガーがやってきた。

「本部には連絡をしておいた。…大丈夫だ、時間なら無限にある。問題は…チャンスだ。」

「チャンス？」

博士は言いたくなさそうに説明した。

「…昨日、東京都内では初めてのサイエンサーの複数同時発生が起きたらしい。次郎の戦闘が終わった直後、戦闘場所のすぐ近くにだ。」

「…まさか、やつらはもう俺たちがここに来ていと知って…狙われているのか？この四人が！？」

「おそらく、そういうことになるだろう。」

次郎は、ここんこの博士は様子が少しおかしい気がする、と思

いながら聞いていた。

「次郎、どうする？このまま作戦を続けるか、不変薬を諦めて某都市に戻るか。」

「そんな事…答えはもう決まっているじゃないか。かえ…戦つよ、命のある限り。それが、僕の運命だと信じて。」

四人の意見は全て一致した。

「…そうだ。あともう一つ言わなければいけない事があった。」

「何ですか、博士？」

再び博士は言いづらそうに話した。

「そのサイエンサー発生の際の戦闘で、犠牲者が出たんだ。犠牲者といつても、ちょっととした怪我に過ぎないがな。」

「それがどうかしたのですか？」

「それが…君の実の父親なんだ。」

次郎は思いもかけない人物の登場に、驚きを隠せなかった。

「彼のいる基地は、ここからそう遠くない。休養ついでに…訪ねてみるか？」

それに対しての答えも、次郎はすぐに決まった。

「父さん、母さん!!」

基地へ着いた次郎は、ベッドで足にギブスをつけ横になっていた父親の姿を目にした。ベッドの横には母もいた。

「…久しぶりだな、次郎。元気になっていたか？」

「まさか、こんな所で再会するとはねえ…何年ぶりかしら？」

「僕は大丈夫だよ、平和に暮らしている。今は…ちょっと危険な仕事をしているけどね。」

「危険な仕事？」

次郎は、両親に現在進行中の作戦の事を話した。二人は黙ってそれを聞いていた。

「そうか…。そんな重要な任務に…。」

「心配しないで、きつと成功させるから。父さんは傷を休めながら、僕の活躍を見物していてよ。…いつか、誰かがやらなければいけない事なんだ。それに、僕は常人以上の訓練を受けたからサイエンサーの奴らを…不変薬を手に入れてみせるんだ！」

その時、父母は彼の『訓練』という言葉から、ここに来た理由、過去の失態を思い出した。

「…次郎、あの時は本当にすまなかった。あの時父さんがお前をアキシストの隊員に選ばなければ、今頃某都市で今より平和に暮らしているはずだったのだが…。今思えばとても後悔している。悪かった。」

「気にしなくていいよ。おかげで大切な仲間もできたし。」

親子の3年ぶりの面談は、30分ほど続いた。だが、いつまでも時間があるほど、次郎は暇ではなかった。

「じゃ、僕も任務遂行があるから、また機会があったら会おう。さよなら、父さん、母さん!!」

「おう、いつでも来いよ!!」

次郎は惜しみながら基地を後にした。

「どうだったか、奇跡の再会は？」

「奇跡って…ただの偶然ですよ。嬉しい事に変わりはありませんがね。」

次郎の状態も回復し、四人は再び目的地を目指していた。

「次郎、これからまた山手線に乗るとなると、再び秋葉原を通る事になるのだが…」

「駄目です！」

彼は単刀直入に答えた。その瞬間だった。Gウォッチがシグナルを鳴らした。

「特別部隊！第45基地にサイエンサー発生だ。どうやら今まで以上の悪性のタイプらしく、こちらでは手が足りない。至急応援を頼

むー！」

「第45基地…父さんと母さんのいる基地だ！行かなくちゃー！」

4名の隊員は急遽目的地をアメシスト基地へ変更した。

「サイエンサーめ…絶対に倒してやる！！」

サイエンサーは基地で大暴れしていた。

「くらえ！！」

隊員たちは爆弾を投げ銃を撃っていたが、あまり効いてないようだった。

「ここにはパイロットがいないんですか！？」

「この辺はあまりサイエンサーが発生してないから、訓練を受けさせているのはほんの5、6人なんだ！」

基地のコピー・ガギグゲゴに乗り込んだ次郎は、頭の中が文句でいっぱいだった。

「なんで僕が毎回戦うんだー！！」

次郎の体は度重なる戦闘による疲労で、最大限の力を発揮できなくなっていた。サイエンサーはそうやってしている間にも、建物にパンチを食らわしてボロボロにしていた。

「うおー！！」

次郎はさっそくGブラストを放った。しかし、相手は悪性のタイプ、ろくなダメージを与えなかった。

「ならばギャギユギヨで…いや、それは無理か。」

ギャギユギヨは試作機のため、某都市のガギグゲゴにしか付属していない事を彼は思い出した。

「くそ！じゃあ…空で死ぬー！！」

機械の巨人はサイエンサーの体を持ち上げ、空中へ投げ飛ばした。

が、次郎の疲労のせいかなり上がらず傷一つなく帰ってきた。怪物は基地の真上に落ち、建物が大きく損傷した。

「このままでは基地が…どうすれば…」

「…Gミサイルを使い!!」

それは基地から小さく聞こえてきた声だった。声の主は次郎の父親だった。

「Gミサイル?使えるの?」

それは謎の多い武器で、ガギグゲゴのものを参考に作られたものだった。いままでに何人ものパイロットが試しにと使ったが、いつもあまり効果がなくいざというときの兵器、という感じのものだった。

「…一か八かだ、喰らえ!!」

ガギグゲゴの胸、肩、背中からミサイルが発射された。ミサイルは外れることなく全てサイエンサーに命中した。

「ギャー!!」

サイエンサーは木っ端微塵に吹き飛んだ。

Gミサイルの有効条件はまだ判明しないまま、四人は再び目的地へと急いだ。次郎は再度両親との別れを惜しみ、作戦の成功を深く祈った。

第十六話 サイエンサー基地攻略戦

「Gミサイルが使えたのは奇跡があつての事だ。本作戦ではそんなことは通用しない。その事をよく頭に入れて気を引き締めて遂行する事だ。」

長い苦労の後やつとのことで基地にたどり着いた山田次郎一行は、これまでの出来事を思い出しながら長官に説明していた。

「博士、Gミサイルはガギゲゴのものを解体したりして作ったんですから、その時点でどのような効果があるかは分からないんですか？」

「…じゃあ特別に教えるぞ、ミサイルの中身を。…そば粉、生卵、猫の死体に…あと毛虫だったかな。」

「…それつてもしかして、アレルギー性のサイエンサー用の武器ですか？だから効く確率が少ないんですか！？」

「おそらく。だが、設定ではそれは極秘情報だから、パイロットたちは何も知らずに無駄に武器を使うのだ。」

次郎はアメシストの適当さにあきれていた。

「これより、某都市からの4名の隊員で構成される特別部隊が、不変薬が保管されているというサイエンサー基地へ侵入し、それを奪取する作戦を再始動する。作戦は30分以内を目安に終了させ、それ以内に基地から隊員全員が脱出しなかった場合は、我々外部援護部隊は失敗と悟り、直ちにガギゲゴで基地を焼き払い、同時に救出へ向かう。用意はいいか？…行くぞ！！」

四人はサイエンサー基地へ、援護部隊はその周辺へと向かった。

「なあ、次郎。ガギゲゴ…要らなかつたんじゃないね？」

ジヨンはそんな事を次郎に尋ねていた。

「…同感。なんだか失敗する成り行きだな。」

「変なこと言うなよ。」

「…無いと話が成り立たないからだろ？」

「博士は黙っててください。」

しこりが残ってるまま彼らは基地へ到着した。それは不変薬が保管されている上にボスがいるためか、以前次郎が囚われたところより一回り大きかった。

「気をつける…サイエンサーは蟻のように、侵入者に対しては容赦しない。」

「…アンモニウマン、まだいたんだ…。いや、なんでもない。」

「博士、存在を消してください。いっそ、死んでくれてもいい。」

「そういう事いうな。」

次郎は扉に手を掛けた。

(これで…全てが終わる。)

四人は暗闇の中へ入った。

「ギャギユギヨ・Nも援護してくれるらしいから、もう俺たちに敵はいない！」

「…いや、使ってくれないと逆に困るんだよな。」

基地の通路は警備が薄いようで、まだ一体もサイエンサーに会っていなかった。だが、いつやってくるか分からない恐怖のため、油断はできなかった。四人は分かれ道にあたった。

「どうする？まるで迷路だな。」

「とりあえず、二手に分かれよう。僕はアンモニウマンさんと、ジヨンは博士と行動してくれ。何かあったら、すぐにGウォッチで連絡を。」

部隊は二手に分かれることになった。四名の勇者は、再びこのメンバーで会うことを誓った。

「健闘を祈る…！」

「お、俺はこういうの初めてだから、全てお前に任せるぞ。…3年間もこういう所にいたんだから、少しは詳しいだろ？」

「…まあ、そんなところでしよう。」

ドッペルゲンガーは指揮をジョンに任せた。

「サイエンサーの基地は、セブン レブンや吉 家みたいにどれも同じ構造ではないのです。故に、私にできるのは司令室を探す事ぐらいです。」

二人は奥へと進んだ。

「アンモニウマンさん、ここにいるボスの事を、もう少し詳しく教えてもらえませんか？」

「…分かった。」

次郎・アンモニウマン組も、順調に進んでいた。

「やつが不老不死で、サイエンサーを作った人物…というのは、もう教えたよな？彼は…一度死んでいるんだ。」

「一度死んでいる？」

「ああ。だが、その死んだ肉体が、どうして不老不死になったのかは誰も知らないんだ。」

その男の謎は深まるばかりだった。次郎は『倉庫』と書かれた扉を見つけた。

「ここ…か？」

「いや、それはないだろう。不変薬は蔓延力の強い薬だ。やつらの事だから、こんなすぐに手に取れるようなところに置くはずがない。」

「

…ですよね。」

二人は300メートルほど進んだところで、ある疑問を察した。

「…ん？なぜ敵が一人もいないんだ？こんなに進んだのに…。」

「…昼食でも食ってんだろつ。」

暗闇は、永く続いていた。

「一体どうなってるんだ!?!…そうか、俺に怯えて逃げちまったんだな!?!」

「いや、それはないです。」

同じくジョンとドッペルゲンガーの二人も、それを感じていた。

「アンモニウマンは強いのがうじゃうじゃいるって言ってたが…騙された?」

「まさか…サイエンサーにも事情があるんですよ、きっと。でも、これだけ歩いたのにいないってのは変ですね。」

その時、上から雫のようなものがドッペルゲンガーの上に落ちてきた。

「…何だ?」

彼は頭上を見上げた。そこには、無数のサイエンサーたちが口をあけながらつかまっていた。

「ギャー!?!」

「…今なんか聞こえませんでした?」

「いや、聞こえなかったが…耳鳴りかなんかじゃないのか?」

二人は気にせずに進んだ。

「…ということ、見事に囚われてしまいました。」

「誇らしげに言わないでください。」

ジョンとドッペルゲンガーは必死の抵抗もあつたが、数に勝れてしまったのだ。二人は両手両足をロープで縛られ、身動きができない状態だった。

「これじゃあGウオッチも使えないな。どうする?」

「『どうする』って…あなた博士でしょう?前みたいに秘密道具でピンチから逃れられないのですか!?!」

「ああ…自由って、素晴らしいなあ…。」

「…ジョン、博士、応答願います。…だめだ、通じない。どうしましようか？」

次郎とアンモニウマンの二人はおそらく不変薬が保管されている、かなり嚴重な部屋を見つけた。さすがにそこには警備の2体のサイエンサーが槍を片手に立っていた。そのため、二人は物陰からそれを報告している、というのが状況だ。

「ジョンがいれば簡単に通れるのだが…。私の力を貸そうか？」

「力を貸す？」

「忘れたのか？私はサイエンサーだ。同じサイエンサーなら互角に戦える。」

次郎は、今だけ彼の行為を許可した。アンモニウマンの体は人間から怪物へ変態した。

「アンモニウマンさん…死なないでください。」

それが次郎の唯一の頼みだった。怪物対怪物の、激しい戦いが始まった。

第十七話 サイエンス誕生の謎

「な、なんだ！…うわぁ！！」
二対の警備人はアンモニウマンの攻撃にあっけなく倒れてしまった。

「前の話で『激しい戦いが始まった』なんて書いた割にはけっこう簡単に終わりましたね…。」

「Wordで書いてるから、ページとかの都合でそうなるんだ。それに、かつこよく終わらせないと次回を誰も見ないだろ？ 私たちの活躍は作者の出世につながるからな。」

「…だいぶリアルじゃなくなってきたような。」
二人は重い扉を開けた。

「私はここで待っている。次郎だけ行ってくれ。」

「分かりました。…お気をつけて。」

「それはこっちの台詞だ。」

次郎は暗闇の奥へと進んだ。彼の姿はすぐに見えなくなってしまった。

「あとはここを守れば…」

アンモニウマンが振り向いたときだった。そこには数体のサイエンスーが押し寄せてきていた。

「い、今頃…」

「自分だけが特別だと思ふなよ…裏切り者め！！」

（サイエンスーの基地って、どうしてこう暗いんだろう…。光に弱いのかな？）

次郎は着々と進んでいた。そこは廊下のようになっており、前方にかすかに光が見え始めていた。

（時間は…あと10分っていうところか。早く見つけて脱出しよう。）

アンモニウマンは自分に襲い掛かる複数の敵と交戦していた。

「おまえたちは…平和という言葉を知らないのか!!」

「平和だと?…我々にとつて、こうやってモンスタートして生きるのが、平和ってモンなんだよ!それを、ブロッケン・モンスターにもかかわらず人間の味方をする貴様に言えた事か!!」

アンモニウマンは対戦相手から衝撃を受け、地面に倒れこんでしまった。彼の意識はそこで途切れた。

「なんだ、お前は!？」

サイエンサーに捕らわれたままの二人の前に、一人の男が現れた。その男は、年離れた真正銘の人間だった。

「私はザ・ブレイカーの設立者、共に全ブロッケン・モンスターの総指揮官だ。名前は…『セロファン・フリーザン』、別称…『バンクーバ・ハンバーガー』!!」

「バンクーバ・ハンバーガー…ま、まさか…!」

「博士、何か知ってるんですか？」

ドッペルゲンガーはその名を既に聞いた事があった。

「そう、私こそが…ガギゲゴの開発者なのだ。計画はまもなく実行される。…ヘリウマン、こいつらを連れて行け。」

男がそう言うと、奥から一人のサイエンサーが出てきて二人を動かせた。おそらく、彼がヘリウマンというサイエンサーで、その男の側近なのだろう。

「シヨール…楽しみたまえ。」

「えーい!!」

山田次郎は、自分の持てる最高の力で扉をあけようとしていた。歩いているときに見えた光は、この扉の金の装飾のものだった。

「…だめか…くそ！」

扉は開きそうになかった。次郎は疲れて座り込んだ。

「せつかくここまで来たのに…ん、何だこれは!？」

次郎は金色の扉の端に、緑色の物質が組み込まれているのを発見した。一見宝石にも見えたが、人工的なものだという感覚がした。

「どこかで見たような…あ！」

それはガギゲゴの全身にある謎の物体と同じものだった。

「…どうして、これがここに…」

「それは私が説明しよう。」

背後からの声に次郎はすぐ振り返った。そこには声の主のだろう男と、二人の少年の仲間を連れたいエンサーが立っていた。

「ジョン、博士!…き、貴様!!」

「さて、さて。話は部屋の中でしょう。それが終わったら、煮るなり焼くなりすればいい。」

年老いた男は扉に手を近づけた。扉は音を立てながらゆっくり開いた。

「ようこそ、私の豪邸へ。」

部屋は予想していた嚴重な倉庫とは違い、その男の司令室らしかった。男は部下に二人の人間を不自由にさせていたものを取らせた。部屋にはソファがあり、三人は彼に座れ、と言われた。

「次郎君も分かったと思うが、私はザ・ブレイカーの首領であり、君の乗る謎の兵器『ガギゲゴ』を製造した技師でもある。」

「一体…何者なんだ？」

「話は長くなるが…教えよう。この、人間と人間もどきの戦いの、真相と共に。」

「君たちは、超古代文明というものを知っているかね？」

「超古代文明？」

それは科学的には立証されていない文明だった。

「超古代文明は実在したのだ。はるか昔…神話に記された時代、人類は今以上の文明を築き上げていた。高度な機械を使い、街には数々の建造物が立ち並ぶ…そんな世界に科学者の私は生まれた。」

「…だが、その文明はなんらかの原因で消え去った。」

それを知っていたジョンが続けたが、彼は反応しなかった。

「私は育つ中で、自由を手に入れたい、という欲望を手に入れた。俗に言う、世界征服というやつだ。」

三人の隊員は、ただそれを聞いているだけだった。

「研究に研究を重ね、ついにその実現方法をこの手におさめた。…大洪水という形でな。」

「大洪水…ま、まさか…」

「そうだ。聖書にも書かれているあの災害は、私が起こしたものだ。…ちつぽけな夢のために、人類を犠牲にしたのだ。」

次郎は、こみ上げてくる怒りをぐつとこらえていた。

「あのころの世界は自然災害というものが非常に少なく、全人類は死に堕ちた。だが、私自身もそれに巻き込まれこの世からおさらばしてしまったのだ。」

「おまえはとても罪深い事をした。地獄の中の地獄に落ちるがよい。」

「冥界へ来たセロファンに、神はそう言った。セロファンは必死に自分の運命を変えようとした。」

「何でもするから、それだけは勘弁してくれえ！」

「…なら、この世界を元に戻せるのか？」

神は訊ねた。

「私の唯一つの願いは、この文明の再興ではない。人間という高度な生物が跡形も無く消え去った虚しさを、取り払ってほしいのだ。私の言いたい事がわかるか？」

「…分かったよ。に、人間のような高度な生物を作ればいいんだろ

「や、やってやるさ。」

ゼロファンは無理矢理そう答えた。

「おまえにそのような事ができるのか？…よし、100年寿命をやる。その期間に、人間の代わりになる物を生み出すのだ。だが、もしそれが果たせなかったら、おまえを魂ごと消し去り、永久に無くなるのだ。」

現実世界に戻ったゼロファンは、残った文明の足跡を使いひたすら高度な生命を生み出す研究をした。そして、彼は見事生物を生み出したのだ。サイエンサーという獣を…。

第十八話 ガギゲゴの鼓動

「サイエンサーは変態能力を持つ。彼らは神に認められた、聖なる魂なのだ。今の日本で研究をしていた私は彼らを世界中に送った。だが…」

だが、その後、彼は驚くべきことを知ってしまったのだ。

「セロファン様、じゅ、重要なご報告があります。」

彼の作った生物の一人、彼の側近のサイエンサーがそう言ったのが切欠だった。

「なんだ、申したまえ。」

「に、人間が…いたのです！」

「なんだって!？」

それは、セロファンの未来を大きく変える出来事だった。

「聞いた話なのですが、アジアとヨーロッパの境の地域に、それが存在したのです。」

詳しく聞くと、ノアという男が大洪水を推測して箱舟を作り、それに何人かの人間と動物を乗せて生き抜いたという。

「そ、そんなことが…」

その時、実験の期間に老いた彼の体は、最期るときを迎えたのだ。

「再び冥界へ来た私は、神にこう言った。」

「神よ、人間は消し去られてはいなかったのだ。私の、この苦悩をどう対処してくれる!？」

「……」

「そしたら神は…再び私と契約をしたのだ。」

「…つまり…おまえは人間がまだ存在していたのにも関わらず、新しい高度生物を生み出したのだな…ふむ…。…よし、褒美をやる。」

「褒美？」

「不老不死の体をやろう。だが、もしまたおまえが人間、またはサイエンサーを死に至らした場合、その体は消滅し、おまえは老衰で死ぬだろう。両者の死は…以前言った通りだ。」

「そして、私はこの体を手に入れたのだ。一度老いてしまったため、この状態からの不老不死だ。私は有頂天に達した。だが…かだ欲望は尽きなかった。」

「じゃあ…今度は何をしたんだ？」

「…趣味の時間だ。」

「趣味…だつて？」

「そうだ。夢を当分の間は手放さざるを得ない状況になった私は、それを永い年月の暇つぶしに選んだのだ。それというのも、私は『死』というものが好物でな。それも、命の尽きるその一瞬が。私は創世者であるが故に自由に操れる彼らに、生き残った人間の抹殺を命じたのだ。…絶対に全員は殺すな、と念入りに付け加えて…。後のザ・ブレイカーの誕生だよ。」

「サイエンサーたちは、命ずるがままに生き残った人間とその子孫をを々と殺していった。同時に私は、『不死身』とは違うこの体のせいで現地にいくことこそ出来ないが、遠くはなれた場所で報告を聞きながらゆっくりと人生を過ごしていったのだ。」彼はうつむきながら続けた。

「だが、見方が高度なら敵も高度、人間はサイエンサーに立ち向かっていくようになった。その結果、人間とサイエンサーの戦力が互角になってしまった。そのために死は生まれなくなった…。サイエンサーは偶然によって生まれた生物、悪性のタイプこそ存在するもののそう簡単に強くはできない。そこで私は…人間の勢力に加勢したのだ。」

それから彼は、死なら人間でもサイエンサーでもかまわなかった、と言った。

「…ガギグゲゴか？」

「ああ。私はバンクーバ・ハンバーガーの名で人間が結集した組織に、開発した機械の巨人を託した。私はそれが終わったら、正体が明かされないうちに彼らの前から立ち去った。」

人々は謎の技師から受け取った兵器で敵をどんどん消していった。だが、敵の数は増えているらしく、全体の数はなかなか減らなかった。それは、ゼロファンが彼らに自ら仲間を増やす方法を伝授したためだった。故に、ゼロファンの役目はなくなり、彼はただ高見の見物をするだけとなったのだ。その後彼は身を隠すようになり、サイエンサーの中でさえも彼の存在を知らない者が出てくるほど、暗黒の人物と化したという。

「そして私は…おおいなる計画を考えついたのだ。」

「それは…何なんだ？」

「…今のこの現状だよ！！！」

そう言うと、彼は手の中にあるものに触れた。上の空間から、ヘリウマンを含めた四人に檻が落ちてきたのだ。

「こ、これは…謀ったな！！！」

「もう遅い。君たちは…私の仕掛けた罠にうまくはまったのだ。」

「わ…な！？」

「大いなる計画…それは、ガギグゲゴを再び私の手元に来させる事だ！！！」

その直後、部屋の壁が大きくゆがみ、崩れた。それはあの機械の巨人がめりこんだためのものだった。

「ガギグゲゴ？なぜ勝手に…！」

「私が動かしたのだ。高性能な兵器に、特定の人物の脳波で遠隔操作ができる機能が隠してあっても不思議ではなかるう？その性能にも範囲があるから、この計画が出されたのだ！！！」

次郎は今起こってる現実に、ただ驚くだけだった。
「さあ、ビッグなショーの始まりだ!!」

ゼロファンはガギゲゴと共に遠く離れていった。

「一体…何をするつもりだ!？」

「分かりきっているじゃないか。…全てを破壊するのだよ!!」

彼とガギゲゴはその言葉を最後に消え去った。

「どうにかしないと…何か案はないのか？」

次郎は問う。だが、誰一人それに答えられなかった。

「おまえ、やつ秘書ならなにか思いつかないのか!？」

ドッペルゲンガーはヘリウマンに殴りかかった。

「そ、そんな…私でさえも、この計画のことはゼロファン様に教えてもらえませんでした。…何ができるっていうんですか!」

「ちい、役立たずめが!」

ドッペルゲンガーはうつむいた。

「…ただ、ゼロファン様はこう言っていただけです。」

「様なんて呼ぶな…さあ、言ってみろ。」

「『私が何もしなくても、理想は現実へと変わる。全ては…結果なのだよ。』…と書いておりました。」

「訳がわからん。」

「…いや…なんとなく…分かる気がする。」

「え?」

次郎は何かを察したようだった。

「もしかしたら…僕たちが勝手に計画を進めていった…ということ…なのかな。」

「…どういう意味だ?」

「…全ての切欠は、僕が不変薬の事を聞いた事だよね?そしてその出来事の始まりは…僕の行動なんじゃないかな?」

「…確かに。だが、おまえがサイエンサー基地に行ったのは、それだけじゃないよな…」

「俺が次郎を捕らえたからだ。」

そう続けたのはジョンだった。

「あの時、サイエンサーの命令を断っておけば…ガギゲゴはここに来る事はなかった。」

彼は深く後悔している様子だった。

「誰だって今につながる行動をしているんだ。悪いのは…セロファンただ一人だけだ。…そういえば、アンモニウマンは？次郎は一緒だったはずだが…」

「…ねえ、セロファンは、人間とサイエンサーが一人ずつでも共存していれば、不老不死の体が無くならないんだよね？…まさかとは思うけど、アンモニウマンはその最後のサイエンサーに使われるため、僕らと同じように捕らわれの身になってるんじゃない？…この話、終わるの？」

第十九話 セロファン強襲

次郎の予想はピタリと当たっていた。

「うっ…何が起こったんだ…。」

アンモニウマンが目覚めたときには、彼は檻の中に入れられ、どこかの密室へ入れられていた。外からは、何かの機械音が聞こえていただけだった。

「この音は…ガギゲゴ？次郎が戦っているのか？」

その音はすぐに遠ざかっていった。

「大丈夫だ…何とかしてくれるさ…。」

「兎に角、ここから出ないには始まらない。…とは言いつつも、どうやって出るか…。」

次郎とその他の二人は、檻を持ち上げてみた。檻は意外と軽かったが、人が出るにはあともうちょっと、といったところだ。

「このー！そうだ、お前も手伝え！！」

ドツペルゲンガーは何もせず座っていたヘリウマンに向かって命令した。

「…私には、セロファン様のご計画を最後まで見届ける義務がございます。…手を貸すわけにはゆきません。」

「御恩と奉公がなんだってんだ！今は…サイエンサーと人間の両方の危機なんだ！どうせおまえも殺される。命は惜しくないのか！？」

彼は一度考えた後、答えを導き出した。

「…分かりました。一時休戦といきましょう。」

ヘリウマンが加わった四人の力で、彼らは外に出る事ができた。

「急ごう。僕はガギゲゴを追う。ジョンは援護部隊の人たちに今の状況を伝えてくれ。博士はアンモニウマンの搜索。ヘリウマンは…何か考えてくれ！」

四人は行動に移した。

「待てー、セロファン！！」

ターゲットの姿を見つけた次郎は、最大限の速さで走った。ガギグゲゴは彼の前方で、Gプラストを乱射していた。基地から出た頃には、辺りが火に囲まれているのがはつきりと分かった。

「…よく出られたな…ほめてやろう。」

次郎は身に着けていた小型銃を思い出し、彼に向けた。

「ガギグゲゴを…止める！」

「それは無理な相談だ。私は、ずっとこれを夢見てきたのだ。それが…君の存在によってかなったのだよ。」

「僕の…存在！？」

そうしている間にも、ガギグゲゴは動き続けていた。

「そうだろうか？ガギグゲゴをここまでよこすには、まず君を取り寄せなければならぬ。」

「で、でも、あなたは様々な刺客を送り込んで、僕たちを殺そうとしたはずじゃ…」

「だが結果的にはガギグゲゴはここにある。不変薬奪取作戦の開始から、全て計画どおりだよ。…田村真を覚えているかね？」

思いがけないマイナーキャラの登場に、次郎は一瞬忘れた過去を振り返った。

「彼を3年半ぶりに変態した最初のサイエンサーに選んだのは他にもない、君をガギグゲゴの正規パイロットにするためだ。無論、そいつを人間世界に送り込んだのも…最初からその目的のためだ。」

「…なら、なぜ彼さえも僕を殺すような真似をした！？」

セロファンは冷静さをやや失って答えた。

「まだ分らんのかね！？私は…全世界のモンスターたちを騙したんだ。夢のため、欲望のために！君に不変薬の事を教えた某都市の

指令官も、あのナトリウマンでさえも…本当の事を知らせなかった。もし真実を伝えたらどうなると思う？分かるだろう、私に何が起るか…。」

次郎の頭に、今までの多大な怒りがこみ上げてきた。

「なぜ…僕をガギグゲゴのパイロットに選んだ?!」

「それは君が選ばれし人類だからさ。」

「選ばれし…人類?」

「そうだ。君の運命には、死という文字が見えてこないのだ。つまり…君の死は遠い場所にある。この意味が分かるかい？君は、私に最後の人間として選ばれるべき者なのだよ。」

「そ…そんな…」

「刺客を送り込んだのも、君の運命を確かめたかったからだ。君が常人ならば、今頃天国にいたはずだ。こんな人間は滅多にいない。」

そして私はできるだけ多くの死をつくりたい。そのためには、最低一人は生かさなければならぬ。私は探し続けた。君のような運命の人間をな。」

次郎は何も言えなかった。彼の言う事を変換すると、自分が存在したからこんな大変な事態になってしまった、という事になるからだ。

「私は君のような人間の誕生を、何年も何年も待ち続けてきた。さあ、協力しておくれ。ガギグゲゴに乗るんだ。」

セラフアンはガギグゲゴの姿勢を低めた。

「…嫌だ。」

「なんだと！命が惜しくないのかね!？」

「お前の理想のために残される体なんて…僕には必要ない！命は…散らすためにあるんじゃないんだ!!」

次郎は手に持っていた銃を撃ち放った。弾丸はセラフイムの左手をかすった。

「…後悔するが良い…誰も私を止められん。最後に笑うのは私自身だ!!」

「おれおらおらおら!!」

ジョン・ブラウンは、事態を知りかけつけた複数のコピー・ガギゲゴとそのパイロットと共に、ギャギユギヨ・Nでガギゲゴを止めようとしていた。だが、数では勝っているが性能の違いゆえに戦力は五分五分といったところだった。強いて言えばゼロファンの方が押している。

「相手がメカならサイエンサーじゃないんだ!俺だって!!」
ジョンはろくに使っていない愛機の性能を最大限に生かそうと努力していた。

「博士、アンモニウマンは!？」

ゼロファンとの討論後、次郎はドツペルゲンガーの姿を見かけていた。

「…だめだ、いくら探しても見つからん。おそらく、サイエンサーがとても嚴重な場所へ移したんだろ…。」

「くそ…!」

その時、あたりからサイエンサーの群れが現れた。

「…なんだってんだ、こんな時に!!」

「こんな時だからこそ…だろ?」

「え?」

そして奥から出てきたのはヘリウマンだった。

「私が…協力を呼びかけました。」

「おまえ…」

「私もやっとな理解する事ができました。今はお互いの危機、協力してゼロファン様…いえ、ゼロファン・フリーザンを倒しましょう!!」

人間とサイエンサー、それも悪心のもものが団結することは、過去

に前例がないことだった。

「よし…いざ、出陣だ!!」

「な、何だ!?!」

ガギグゲゴを操るセロファンは、目の前の光景を見て啞然としていた。

「モンスターめ…裏切ったな!!」

サイエンサーたちは次々と巨大化していき、ガギグゲゴに対抗していた。

「飼い犬に手をかまれたか…まあよい、誰も勝てるやつはおらんからな!!」

セロファンはそれでもガギグゲゴの武器を上手く使いこなし、敵を破壊していった。

「早く乗れ!君が一番ガギグゲゴを上手く使えるんだ!!」

次郎も運ばれてきたコピー・ガギグゲゴに乗り込もうとしていた。

「山田次郎、出撃します!!」

第二十話（最終話） 新世界へ

「いっけえ!!」

次郎はゼロファンの乗るガギグゲゴへ突進した。2体のガギグゲゴは激突したが、コピーの方だけが弾け飛んだ。

（ガギグゲゴの性能の違いが、勝敗の決定的差にはならない事を…見せてやる!!）

「な、なぜサイエンサーたちも援護してくれるのだ!？」

説明を受けていないアメシストの援護部隊の隊員たちは、ただボーンと激戦を眺めていた。

「次郎からはガギグゲゴを攻撃しろといわれたが…この場合はどうすればいいんだ!」

彼らは非常に悩んでいた。そこへ交渉を終えたドツペルゲンガーが現れた。

「サイエンサーは味方だ!ガギグゲゴだけを破壊しろ!!」

「…一体、何が起きたんだ!」

「詳しい事は終わってからだ!!」

「ジョン、同時攻撃をすれば影響が出るはずだ。できるか?」

「できない訳ないだろ。さあ、1、2の3でけりをつけよう。」

二つの巨人は、同じタイミングで必殺技を繰り出した。

「Gブラスト!!」

「守妬頼苦・刃亜棲賭!!」

さすがにこの攻撃で、炎上まではいかないが、ガギグゲゴは倒れた。

「ちい、こんな筈では…」

ゼロファンは酷くあわてていた。同時に、彼はガギグゲゴの装甲

に触りながら、何かを探していた。

(こうなったら最後の手段だ。これしか…手はない!!)

そして彼は装甲がふたのように外れる部分を見つけた。その中には細かい電子回路が詰まっており、奥に『DANGER - 危険 -』のテープが張られたスイッチがあった。セロファンはためらうことなくそのスイッチに手を掛けた。

「な、なんだ!？」

ガギグゲゴは変化を見せた。それは、ガギグゲゴの緑色の発光体が崩れ落ち、すべて全身から離れるという変化だった。

「セロファン、ガギグゲゴに何をした!？」

「見ての通りだ。ガギグゲゴの全身の発光体『エナジー・ロック』の真の働き…それは、ガギグゲゴの能力を制限する事だ。そしてそれがなくなつた今は…ガギグゲゴは無敵だ!!」

戦力はこの瞬間、逆転したのだ。

「うわああ!!」

隊員たちはそれを聞くなり、一斉に後退した。ガギグゲゴは、以前よりすさまじい破壊力でGブラストを放とうとしたところだった。

「そこまでだ、バンクーバ・ハンバーガー!!」

「あ、RCさん!？」

そこにいたのは、昔日のロシアの技師だった。

「誰だ貴様は…なぜここへ!!」

「なぜって?…こうするためさ!!」

そう言うとは彼は何かをガギグゲゴに投げた。それは装甲に張り付き、ホッチキスのようにめり込んでいった。

「何のまねだ!？」

「それかい?私が開発した…通常の33倍の抵抗値を持つ超小型強力抵抗器『レッドホーン』だ!さあ、ガラクタと化した巨人の姿を

「見るがよい!!」

「な、なんだと…!!」

ガギゲゴはカメラアイの光さえ消え、動きが完全に停止した。

「き、貴様…」

「バンクーバ、この状況が判断できたならば…心の不幸を呪うがよい。」

「なに、不幸だと!？」

「そう、不幸だ。」

「…お前は…」

「そもそも、貴様の精神がいけないのだよ。フツ、フハハハハ…」
RCは高らかに笑った。

「いいのかな、こんな終わり方で…。」

ゼロファンは自殺さえしなかったため、そのままアメシストに連れて行かれることとなった。

「問題ないんじゃない?今のところはハッピーエンドだし。」

「ところで、アンモニウマンは?」

「あ!!」

忘れ去られていた彼の存在は、すぐに搜索された。そして彼の姿はすぐに確認できた。

「わるい、完全に忘れてた。すまん。」

「無理もないよ。なんでも、私のいた部屋はとても嚴重で、世界で一番強度があるらしい。」

「なんだ。そうだ、不変薬はどこにあるんだ?最初からそれが目的でここまで来たのだが…」

ドッペルゲンガーはヘリウマンに質問した。すると彼は、とても言いにくそうにこう答えた。

「実は、それなんです…言ってもいいですか?不変薬は…ないのです。」

「ちよ、何この展開？」

「いや、あることはあるんですよ。ですが…」

そう言うのと彼の部下のサイエンサーが、紫色の液体の入ったフラスコを持ってきた。

「それなのか？なんだ、あるじゃないか。さあ、さっさと開けようぜ。」

ドッペルゲンガーはそれに手を近づけた。だが…。

「い、いけません！」

ヘリウマンはその手をひっぱたいた。

「何だつてんだよ！！」

「それは…腐っているのです。」

「…腐っている？」

「正確には違いますが、人間の言葉で言うとそんなもんでしょう。長い間手入れもせずにはうっておいた為に、中で細菌が繁殖しているのです。もしその中に病気の元でも入っていたら、世界中のサイエンサーが死んでしまいますよ。」

「じゃあ…俺たちの努力は水の泡だったってのか！？」

「いえ、そういうことはありません。」

「話をややこしくするなよ。」

「あなた方の技術を使えば、多少時間はかかるものの修復が可能だと思います。どうでしょうか？」

ヘリウマンは先程登場したばかりのRC技師に尋ねた。

「その通りだ。」

人間とサイエンサーはこの一件を切欠に、今後共存を目指し『友好宣言』を行った。宣言は世界中に伝わり、一週間でサイエンサーの発生は0となった。アメシスト他各地の組織は、ガギグゴ等の残った謎をセロファンから聞き出し、以後はサイエンサー保護を目的

とするようになった。一方ザ・ブレイカーは、基地にいるサイエンサーを全て人間界に進出させると共に、それが終了し次第基地を元対サイエンサー組織の受け渡し方針となった。

「で、目的は果たせたのかい？」

とある日、教諭の松永は唐突に次郎に聞いてきた。

「聞かなくても分かるでしょう？あなたの能力さえあれば。」

「君らしいよ。」

次郎は窓から見える空を見上げてみた。

「重要なのは…結果なんですね。」

戦いは終結したのだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9399d/>

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴ

2009年3月24日12時07分発行